

41723

教科書文庫

4
810
41-1932
20000 67984

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

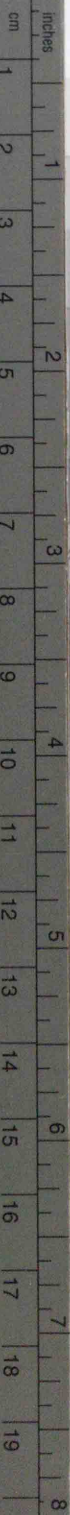


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
昭7

中學新國文 卷七



文部省檢定濟

昭和七年八月廿四日 中國語文教科



室料資

文學博士 笹川種郎編

中學新國文 卷七



株式會社 帝國書院發行



42
810
BB7

卷 七 目 次

- ヨミイ 一 春の光
- ① 二 世の中
- カヨミイ 三 朧月夜
- カヨミイ 四 スツラットフォード
- ヨミイ 五 悲劇の古城
- 六 藝術的魅力
- 七 いかるがの宮
- 八 言を以て交はる
- 九 馬琴と華山
- 一〇 芳流閣
- 一一 奥の細道

ヨミイ 春の光
ヨミイ 世の中
カヨミイ 朧月夜
カヨミイ スツラットフォード
ヨミイ 悲劇の古城
ヨミイ 藝術的魅力
ヨミイ いかるがの宮
ヨミイ 言を以て交はる
ヨミイ 馬琴と華山
ヨミイ 芳流閣
ヨミイ 奥の細道

- | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 松 | 瀧 | 芥 | 瀧 | 三 | 和 | 土 | 島 | 夏 | 上 |
| 尾 | 澤 | 川 | 澤 | 木 | 辻 | 岐 | 村 | 目 | 田 |
| 芭 | 馬 | 龍 | 馬 | 露 | 哲 | 善 | 抱 | 漱 | 敏 |
| 蕉 | 琴 | 之 | 琴 | 風 | 郎 | 麿 | 月 | 石 | |
| 毛 | 五 | 介 | 四 | 三 | 三 | 二 | 四 | 九 | 五 |
| | | 一 | | | | | | | 一 |

- 一二 複雑と單純
- 一三 蟬の聲
- 一四 鹽原
- 一五 落花の雪
- 一六 不滅の光
- 一七 宣長のことば
- 一 我にしたがひて
- 二 儒者に
- 三 近き世
- 四 昨日は
- 一八 直覺力
- 一九 油断
- 二〇 伏木がくれ

- 島崎藤村 七
- 尾崎紅葉 七
- (太平記) 七
- 佐々木信綱 八
- 本居宣長 九
- 元田作之進 九
- 山本有三 九
- (源平盛衰記) 一〇

- 二一 七騎落
- 二二 俚諺論
- 二三 どぶかつちり
- 二四 麒麟
- 二五 偉人
- 二六 逗子より
- 二七 光の泉
- 二八 月・雪・花

- (謠曲二百番) 二二
- 大西祝 二〇
- (狂言記) 二五
- 谷崎潤一郎 二九
- 嘉納治五郎 二四
- 徳富蘇峰 二五
- 室生犀星 二六
- 芳賀矢一 二六



孔子

(狩野探幽筆)

目

次終

目次

春の光



上 敏
號は柳村
文學博士
京都帝國大學
教授
(大正五年歿
年四十四)

中學新國文 卷七

一 春の光

上 田 敏

生命の中流に棹さして、十分に世の苦樂を味はひ、自己の意識を
 強めようとする者は、草木の角々み渡る春の日を浴びて、失はれた
 力のとみに復歸するを感じ、新しい熱意をもつて諸の印象を迎へ
 る。郊外にも都會にも、自然の風色に、人事の活動に、春光と生氣が
 漲り渡るのだから、彼岸から八重までの櫻時ばかりでなく、木瓜も
 海棠も、薔薇も、堇も、蓮華、蒲公英も、垣根の若葉も、鳥の聲も、こまやか
 に懐しくしとくと降る春の雨も、花見がへりの土手の上、あげ潮
 とともに春愁をもたらす夕暮の風も、さまざまな夢思はせる靜寂

一 春の光

宇佐郡小南村
岩崎 建一

中村岳陵筆

な池の汀に、菖蒲咲く頃も過ぎて、瑠璃色めいた碧空に、白い雲がふわふわと動いて行く春と夏の界までも、すべての景物は多感な人に迫つて来て、はやくも亂心地ならしめる。世人動もすれば因襲

春色
(中村岳陵筆)



に囚はれて、睦月如月彌生の三月を春とし、櫻花の散るのを見て季すでに過ぎたりとする者もあるが、それは眞に春の心を解したものでない。春は浅いもよく、盛もよく、閑なるもよい。春はたゞ人の心を浮立たせて、氣輕な戯に赴かしめるのではな

中村岳陵

壓迫

静観

い。この時うるはしい萬物は、生の惱を感じて、精力の横溢に壓迫される。そこに創作の苦痛がある。芽ばえ花咲くことは一種の緩和であつて、いはば重荷を下した時の安心に過ぎぬ。されば、この春色に對する人間の心も、萬物の活動に同情し共鳴して、こゝに平行した變化を感じ、偉大にして深沈たる大自然の節奏に合するのである。もし花を看て、たゞ單純な官能の快感を貪るのみならば、同じ色の造花を見てもよいはずであるが、天然の千紫萬紅には、それ以上の深い意味が自ら籠つて居て、思邪なき靜觀の人心に通ずるものがある。舊くしてしかも常に新しい春のめぐり来て、吾等の今更に胸さわぎするのは、この大自然の脈搏を感じるからである。爽快な夏も面白く、靜閑にして豊かな秋も楽しく、寂としてまた自ら人に勇あらしめる冬も佳いが、自然の胸を抱く春の心は、年ごとにかはりなく切である。

主奏
の叙
の
の

中庸

春を愛するは若きを愛するのだ。春を惜しむのは盛年の去り易きを惜しむのだ。生と死と美と悦と愁と愛とをうたふ古今の抒情詩には、老と若さの對照が、いつも伴奏をつけて居る。「あゝ少年にして智あらば、老年にして力あらば」と、折返し、歌ひつゞける古の言の葉を聴くごとに、春と少年のあわたゞしく過ぎゆくのが惜しくてならぬ。

春のひかりの波にうかんで、暢びやかに朗に生を樂しめ。「時」が食みへらす人間の力も、萬物の復活に交感して補はれてゆく。しかもまた、春のたのしみには愁もあり、悦もあり、惱もあつて、それが吾等の生活力を刺戟し促進する。かくて晩春の候、膚滑に筋も弛んで、やゝ倦怠を感じるのは、精力過剰の爲であらうが、續いて來る夏秋の努力に具へる準備とも思へる。一年ごとの春の光を身に浴びて、心の奥まで浸つて居れば、老はおのづと退散する、人もし熱

情を以て春を追求したならば、その追求の間に自然と力が加はり、老は壞きとめられよう。春の恵を輕んずるのは大の量見違である。天の與ふるを取らないと罰があたる。(思想問題)

二世の中

世の中にたえて櫻のなかりせば

さくら花咲きにけらしなあしびきの

山のかひより見ゆる白雲

おきふしにをしむかひなくうつゝにも

おきふしにをしむかひなくうつゝにも

在原業平

紀貫之

凡河内躬恒

現
の
の
の

2

在原業平
阿保親王の第五子
(元慶四年卒)

紀貫之
古今和歌集撰者の一人
(天慶九年卒)

素性法師
僧正遍昭の子
俗名良岑玄利

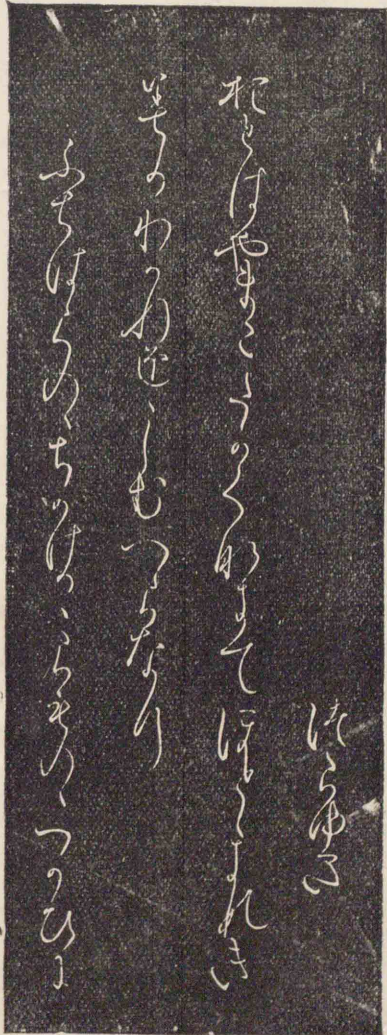
久方り

祝詞
若天室の

何故

傳貫之筆蹟

平兼盛
赤染衛門の父
(正暦元年卒)



わが宿の梅の立枝や見えつらむ

平兼盛

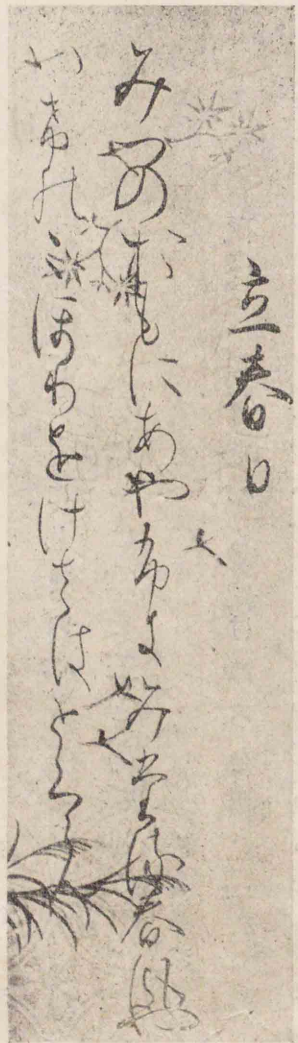
みわたせば柳さくらをこきまぜて
みやこぞ春の錦なりける

夢にも花の散るをいかにせむ
素性法師

紀友則
古今和歌集
撰者の一人

紀友則筆蹟

小野小町
出羽守良真の
女



ひさかたの光のどけき春の日に
しづ心なく花のちるらむ

思ひのほかには君がきませる
紀友則

花のいろはうつりにけりないたづらに
中納言

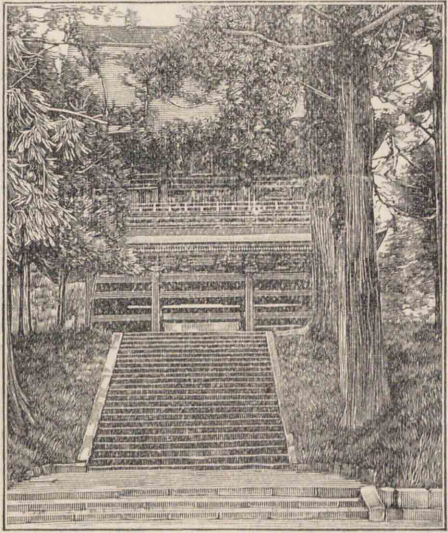
わが身よにふるながめせしまに

小野小町

頭痛

未吉

圓覺寺



るのは妙だ。妙だから又登る。仰いで天を望む。寝ぼけた空の奥から、小さい星がしきりに瞬をする。句になると思つて又登る。かくして到頭上まで登り詰めた。石段の上で思ひだす。むかし鎌倉へ遊びに行つて、いはゆる五山なるものをぐるぐると尋ねてまはつた時、たしか圓覺寺の塔頭であつたらう、やはりこんな風に石段をのそりくと登つて行くと、門内から黄色な衣を着た、頭の鉢の開いた坊主が出て來た。余は上る、坊主は下る。すれちがつた時、坊主が鋭い聲で「何處へ御出でなさる」と問うた。余はたゞ「境内を拜見に」と答へて、同時に足をとどめたら、坊主はすぐに「何もありませんぞ」といひ捨てて、すたく下りて行つた。あまり洒落だから、余は少し先を越された氣味で、段上に立つて坊主を見送ると、坊主はかの鉢の開いた頭をふりたてふりたて、遂に姿を杉の木の間に隠した。その間、かつて一度も振返りはしない。成程禪僧は面白い。きびくして居るなどのつそり山門を這入つて見ると、廣い庫裡も本堂もがらんとして、人影はまるでない。余は、その時に心から嬉しく感じた。世の中にこんな洒落な人があつて、こんな洒落に人を取扱つてくれたかと思ふと、何となく氣分が晴々した。禪を心得て居たからといふ譯ではない。禪のぜの字もいまだに知らぬ。唯、あの鉢の開いた坊主の所作が氣に入つたのである。

かうやつて、美しい春の夜に何等の方針も立てずに歩いてゐるのは、實際高尙だ。興きたれば興きたるを以て方針とする。興去

禪(真程) 可針

中

禪

中園

又平
天津繪の開祖
姓不詳

朧月夜
 朧月夜を以て方針とする。句を得れば得たところに方針が立つ。得なければ得ないところに方針が立つ。しかも誰の迷惑にもならない。
 「仰數春星一二三」の句を得て石磴を登りつくした時朧に光る春の海が帯の如くに見えた。山門に入る。絶句は纏める氣にもならなくなつた。即座にやめにする。石を齧んで庫裡に通ずる一筋道の右側は岡躑躅の生垣で、垣の向うは墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い處で幽に光る。數萬の蔓に數萬の月が落ちた様だと見上げる。何處やらでしきりに鳩の聲がする。棟の下にでも居るらしい。
 雨垂落の處に、妙な影が一行に並んでゐる。木とも見えぬ草では無論ない。感じからいふと、又平のかいた鬼の念佛が、念佛をやめて踊つてゐる姿である。本堂の端から端まで一行に行儀よく

霸王樹



並んで踊つてゐる。その影が、又本堂の端から端まで一行に行儀よく並んで踊つてゐる。朧夜にそのかされて、鉦も撞木も奉加帳も打捨てて、誘合はせるや否や、この山寺へ踊りに來たのだらう。
 近寄つて見ると、大きな霸王樹である。高さは七八尺もあらう。絲瓜程な青い胡瓜を、杓子のやうに壓しひしやげて、柄の方を下に、上へくと繼ぎあはせたやうに見える。あの杓子が幾つ繋がつたらお仕舞になるのか、わからない。今夜のうちにも廂をつき破つて、屋根瓦の上まで出さうだ。あの杓子が出來るときには、何でも不意にどこからか出て來て、びしやりと飛びつくにちがひない。古い杓子が新

しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちに段々大きくなるやうには思はれない。杓子と杓子の連続が如何にも突飛である。こんな滑稽な樹は、世の中にたんとあるまい。しかも澄ましたものだ。(漱石全集)

四 スツラットフォード

島村抱月

ロンドンから西北へ百哩許、エヴンの細波に夜毎の夢を洗はするスツラットフォードの片隅に、方五間には足るまじき一地を劃して、そこを^{礼久し}こしへに世界の眼目とし、そこに不滅の^{不滅の}靈火を點じた造化の寵兒シエクスピヤの家がある。大英國はよし亡びても、シエクスピヤは亡びぬ。この一地域あるが爲に、永劫不壞なる英國も亦幸ではないか。
ロンドンに出でしより後のシエクスピヤ、殊に著作ありてより後



名は瀧太郎
號抱月
早稻田大學教
授
(大正七年
卒
年四十八)

化

方
正
角
四
二
三
二
角
化

清
島
村
抱
月

15-67年
1616年

シエクスピヤ

李
水
杏
ス
モ
ム

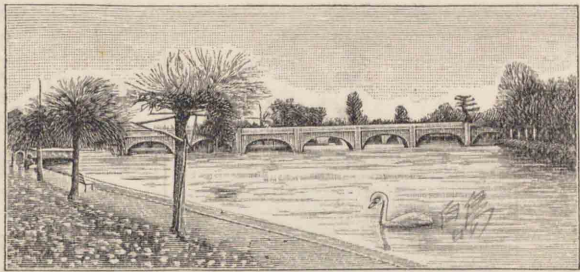


William Shakespeare

のシエクスピヤは、千の傳記、百の考證よりも、彼みづからの書こそ最も明白に彼自らを傳へて居る。「ハムレット」「マクベス」の著作は、眞に天日の輝くが如く、あまねく後昆を照らしてゐる。これに想像を加へんには、既にあまりに煌々たるに過ぐるであらう。唯、我が最も想ふのは、スツラットフォード・オン・エヴンの一青年たりし當時のウィリヤム・シエクスピヤが身の上である。

この思に導かれて、我がはじめてスツラットフォード・オン・エヴンの土地を踏みしは、過ぐる年の春某月某日であつた。オクスフォードから汽車で二時間が程、巴旦杏の花の咲いてゐる赤い家いくつから

を過ぎて、停車場近く来れば、かしこに見える一群の樹立が、はやホ
ーリーツリニチーの森といふに、何となく心ときめく。繁みの色
はまだ調はぬながらの蒼さ、中央から肅然とし
て立上つたる尖塔は、げにも黙して天をさす指
の如く、其の深い意義をば、唯、感涙あるものばか
りが測り得よう。停車場から新開の道を病院
の前に出て町にかゝると、もうそこに行きあた
りがある。 廣い四つ辻の真中にしつらへた噴
水は、今様ながら、町は何處ともなくさつぱりと
して、優雅の趣を具へてゐる。 店のかまへ看板
の工合などで、どうもただの町ではないやうだ。
右手は商人御宿、向うに農作物の店が見える。

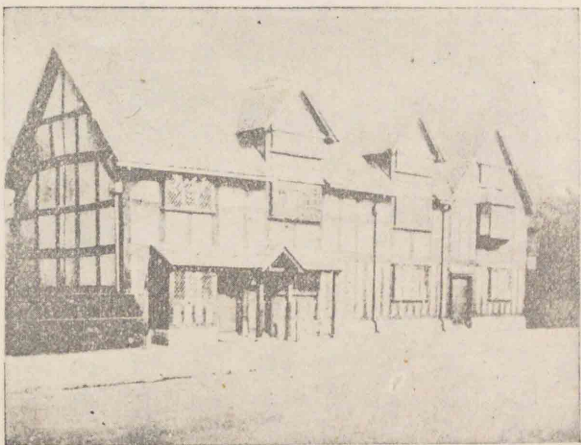


エヴン川

あの店。 シェクスピアの父の店も盛な時はあんな風であつたらう。

見れば店先に子供が遊んでゐる。 ひよつとすると、あの子の顔が
シェクスピアの幼顔に似てはゐまいかと、用もないにその間近まで
行きかけると、子供は外国人と見て逃出した。 馬鹿らしいとは思
つたが、いや、しかし、この邊は古來交通が薄く、血統が單純であるた
め、面相がおのづから類似型してゐると聞いた。 シェクスピアの面
相には、スツラットフォード型といふ物が現はれてゐたといふ。 さす
れば今の子供に、彼の幼顔が映つてゐまいにも限らぬ。 も一度跡
をつけて見ようかなど、忙しい空想に耽つてゐる間に、時は午近く
なつた。 地圖によると、此處から向うの角の小路を抜ければ、すぐ
其處がシェクスピアの舊宅の残つてゐる處である。 と思ふと飛立
つやうには感ずるが、まづ宿を取つた上と、大橋通のゴルドンホテ
ルといふを探した。 廣い通を真直に辿ると、いくらかもあるかぬ内
に、はや橋が見える。 その下はエヴン川であらう。 町はこれで盡

シエクスピア
誕生の家



さるのだから、實に小さい可愛らしい都會である。ホテルは橋のすぐ手前であつた。

旅行の季節とて、ホテルの客室はすべて約束済。是非なく近所の室内裝飾品を賣る家の一室を借りさせ、食事だけはホテルに来てすることにした。さてシエクスピアの生まれた家をたづねる。折しも空には薄雲がかゝつて、冷氣を含んだ風が町を吹渡つてきた。何だか淋しいやうな悲しいやうな風情である。

想像して見ると、シエクスピアがまだ腕白ざかりの頃は、例のグラシマースクエアに通ふ朝夕、途すがら弟と肩を組んで、この邊を行

中世の建築
誕生室……シエクスピア

スコット

英國の詩人小説家

説明係

説明係

カーライル

英國の文學者

(西曆一七九五—一八三一)

頭註を見よ

きつ戻りつしたものであらう。父が家産の傾くにつれ、生活の辛苦は、早くもこの大天才が青年の夢を蝕みそめて、弟と共に商品の買出しから、たまには得意まはりもする。稼業の手傳に追はれて、好きな讀書の暇もなくなつた。夜遅く店を仕舞つてから、わづかに自分の寢室で、覺束ない蠟燭の光をたよりに、昔の唄の本などを讀んでゐると、そのあかりが、あのいま見える東北の角の窓から微に漏れる。

げに世界のいかなる處にも見がたい偉觀は、この矮屋の一隅、シエクスピアの誕生室であらう。

金字に彫られては、帝王の書架をも

かざる文學史上の大なる名が見よ、この一室にきては、いかに賤小に謙抑に、窓壁天井にその跡を留めて居るかを。説明係の男が、一葉の薄紙を窓の硝子にあてて指さし示す所を見れば、縦横に切込みたる名のなかに、鮮にスコットの名も見られる、カーライルの名も

中島武敏
 呪咀の神佛の力をかりて自ら
 の心を通すこと
 豫言、將來はあつたことあり
 うわさの如き事あり
 學問、學校にまわらぬ
 聖蹟、なることあり
 相像の間に入らず
 相像の間に入らず
 相像の間に入らず
 相像の間に入らず



土岐善麿
 東京朝日新聞
 記者

ヨリ

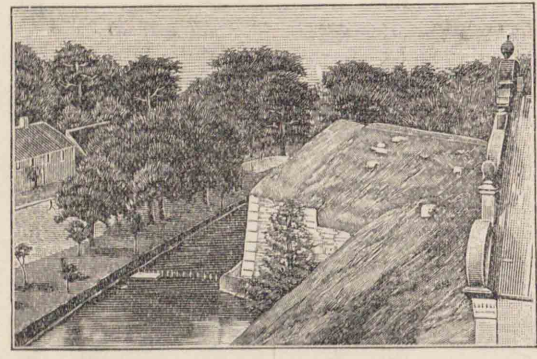
五 悲劇の古城

土岐 善麿

「このテラスです、王子ハムレットが父の亡霊を見たといふのは、」
 そこには海岸に面して、十數門の大砲がずらりと並んでゐる。
 臺詞にあるあの身をつまみ切られるやうな夜風の冬ではなくて、
 いまは夏の白晝ながら、さすがに北歐の濱邊、汗のにじむほどのこ

(抱月全集)

古城の濠



ともない。

シェクスピアが、あの名作の舞臺にとつた古城は、このエルシノー
 アのそれで、デンマーク風にいへばヘルシ
 ギヨールである。千五百七十五年に建て
 たもので、北歐におけるルネッサンスの最も
 うつくしい建築物とされてゐる。いかに
 もうつくしい。實によく保存されたもの
 で、高々とそびえる四隅の塔、屋根の勾配、そ
 れを葺いた青銅のさびの静かさ、それらが
 若葉青葉のこんもりと茂つた森のうへに
 つづく。正門をはひつて行くと、藻草を青
 青とたたへた内濠、しだれた青柳、その斜に生ふる青柳が、白い葉う
 らをば河水の鏡に映す岸近う、そこに美しいオフエリヤの死體が浮

んでゐるやうな。――

「いまはの苦痛をも知らぬげに、人魚とやらか水鳥か。――坪内老博士の名譯が、おのづと記憶にのぼる。」

花でつゝ、まれ涙の雨に

ぬれて墓所へしよぼくと

そんな可憐な歌聲も、橋のそばからきこえてくるやうな。――

境地が既に詩だ。その詩の世界、傳説めかしい自然へ、大詩人のゆたかな想像から、悲劇の人生が展開する。

「To be or not to be」といふのは、日本語で何といひますか？」

日本通の良人をもつ外國婦人が聞く。

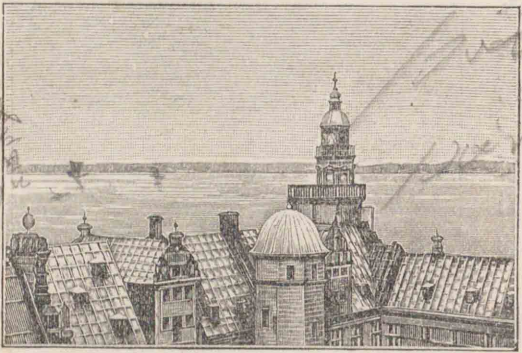
「芝居の臺詞のやうにいひますとね。」

と、僕は眼の高さにこぶしを握つて、

坪内老博士の名譯が、おのづと記憶にのぼる。
その苦痛も知らぬげに、人魚とやらか水鳥か。
花でつゝ、まれ涙の雨に
ぬれて墓所へしよぼくと

「ながらふべきかな、ながらふべからざるか。」

「おゝ、むづかしい！」



古城より見た
カテガット海

古城の天邊にあがる。倒たる素敵な景色だ。カテガット海の碧瑠璃、わづか二哩半を隔てて、對岸は島かと思えるスエーデンの突端、その海岸線のからりと晴れた連續古風な白帆を張つて、すべるやうに快走する大船、小船。

昔、この海峽へはひつてくる船といふ船は、皆ことごとく城壁の下を洗ふ波打際に呼びとめられて、中世紀らしい恐怖と慘虐とのうきめに逢つたものだといふ。地下室には冷々と肌を

憂
か
し
い

トの公園に休む。そこにも古城があつて、ハムレットが埋葬された所といはれる。

木蔭にハムレットの銅像が立つてゐる。銅像のホルガーもゐた。かういふ傳説や戯曲の中の人物が實在の記念のやうに、銅像となつて立つてゐるのを見てゐると、見てゐる自分が、却つて傳説の中の人物のやうな、一種の錯覺がおこつてくる。(外遊心境)

九

六 藝術的魅力

和辻 哲郎

私は昔ながらの山野と矮屋とを見慣れた我々の祖先が、曾て夢見たこともない壯大な伽藍の前に立つた時の、甚深な驚異の情を想像する。

伽藍は、たゞ單に大きいといふだけではない。久遠の焔の様に蒼空を指す高塔がある。それは、人の心を高きに燃上らせながら、

しかも永遠な靜寂と安定とに根をおろさせるのである。相重なつた屋根の線は、ゆつたりと緩く流れて、大地の力と蒼空の憧憬との間に、輕快奔放にして而も莊重高雅な力の諧調を示してゐる。丹と白との清らかな對照は、重々しい屋根の色の下で、その力の諧調に絡みつく。その間にはなほ斗拱や勾欄の細やかな力の錯綜と調和とが、交響の大きい波のうねりの間の、濃淡の多い、さゝやかなメロデーのやうに、人の心の隅々までも響きわたるのである。更に又眞理の寶藏のやうに、大地を壓する殿堂がある。それは、人の心を甚深なる實在の奧祕に引寄せながら、しかも恐怖を追拂ふ強大な力を印象する。そこには、線の太い力の執拗な格闘がある。しかしすべての争闘は、結局雄大な調和の内に融けこんでゐる。それは相戦ふ力が、完全な權衡に達した時の崇高な靜寂である。盡くることなき力を人の心に暗示する深い沈黙である。さうして、

この簡素な太い力の間を縫ふ、細やかな曲線と色との豊富微妙な
 伴奏は、莊嚴に壓せられた人の心に優しい、しめやかな手を觸れる。
 もとより、我々の祖先は、右の如き感じかたをしたわけではある
 まい。しかし、彼らはとにかくその漠然たる無意識の内に、右の如
 き建築の美を感じないではゐられなかつたであらう。さうして
 身ぶるひの出るやうな烈しい感動の内に、たゞ／＼その素朴な頭
 を下げたことであらう。しかもこの際、彼らの意識に上る唯一の
 ものは、三寶を尊重するといふ漠然たる敬虔の念であつたに相違
 ない。彼らの知つてゐるのは、たゞ新しく彼らに襲來した「佛教」が、
 此の如き信仰を彼らに齎したといふことだけだからである。か
 くして彼らは、その感動の烈しさの故に、始めて偉大なる生活に對
 する眼を開かれ、始めて眞に尊崇すべきものに出逢つたやうな心
 持を味はつたことであらう。

佛

地 藏 尊



(國寶・法隆寺藏)

神祕(靈妙不可思議)
不可思議の神祕

轉瞬(一瞬またき)

極度(極端な極度)

合掌(既方の和を合掌)

歸依(信仰して我を)
歸依する

觀喜(よろこび)

偶像(木石金など)
心をかり作る像

權威(ある)

超人的(人間を超越)

慈悲を垂れ
存心を行ふ

私は更に進んで、堂内に歩み入つた彼らの姿を想像する。彼らの眼前に開いた大きい薄暗い空間は、これまで曾て彼らの經驗しないものであつた。そこには彼らが山野にさまよひ、蒼空を眺める時よりも、もつと大きい「大きさ」があつた。彼らの眼には天を支へるやうな重々しい太い柱が見える。それが、莊嚴な堂内の氣分を、益々莊重神祕ならしめてゐる。併し彼らがそれを感じるのは、一轉瞬の間である。彼らの眼は、直ちに正面の佛像に吸寄せられ、その瞬間に、又極度に緊張した彼らの全心を奪ふやうな烈しい身ぶるひが、走りまた走る。彼らは自ら頭を垂れ、自ら合掌して、歸依する者の空しい、而も歡喜に充ちた心持で、その佛像を禮拜する。それは確に、彼らにとつて一の偶像であつた。彼らの知る所は、唯それが無限の力と最高の權威とを有する佛の姿だといふことである。超人的な神祕な力を以て人間を救ひ、人間に慈悲を垂

厥倒精神におしたはす
實證(實際の證據を以て)

六 藝術的魅力

菩薩(自行他利の行を修したるもの)

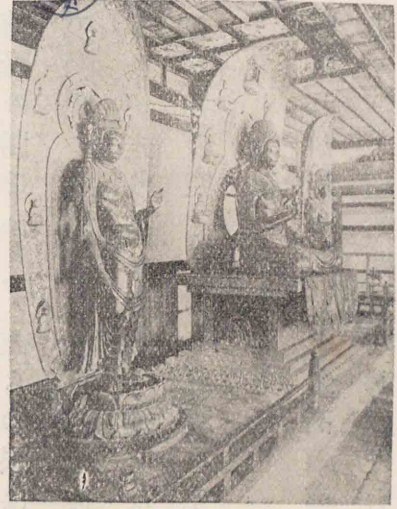
遺物(彼世にあり傳はるるもの)

對境(客觀の事物、精神作用の目的物)

美的魅力
藥師寺藥師三尊像

美的鑑賞
美の心を以て賞する事

藝術
藝術とは何ぞや、禮拜しないではゐられない。



れる菩薩の姿だといふ事である。さうして彼らは、自分を壓倒する激しい感激によつて、其の知識の偽でない事を自分自身に實證した。彼らは自己の前にある物が、右の如き神祕な力の現れである事を信ずる他はない。又それを

併し、眞に彼らの感激を誘つたものは、其の佛像の偉大な美であつた。固より彼らは、當時の佛像の遺物を、我々が藝術品として鑑賞するが如く、唯美的鑑賞の對象として佛像に對したのではないが、併し無意識の内にも、常に佛像の美的魅力から逃れる事は出来なかつたであらう。百濟王が始めて釋迦の銅像を獻じた時、それ

我々の祖先の著名なる一人

大無師(大無師の自云)

端嚴(たしかなるもの)

相貌(かほのたち)

隨喜(神樂を興へし喜ぶ)

歡喜(こころを喜ぶ)

興隆(こころを喜ぶ)

藝術的精神(藝術上の精神)

未開人(文化の未だ開けぬ人)

圓滑(なめらかな)

清楚(こころを喜ぶ)

肢體(からだ)

無直(まっすぐ)

いかりの美しさ(無師の美しさ)

六 藝術的魅力

深淵(あふみ)

凝止(こごり)

を見た我々の祖先の著名なる一人は、其の未だ曾て見ざる端嚴なる相貌に隨喜した。さうしてそれが、佛教傳來の機縁であつた。其の後佛教の興隆と共に益藝術的精練を加へた佛像が、いかに我々の祖先の心に、美的魅力を投げかけたことであつたらう。それは殆ど藝術を持たなかつた未開人が、忽ちにして生に溢れた藝術品の持主となつたのであるから。試に見よ。その圓い滑らかな肩の美しさ。清楚な、しかもふくやかなその胸の神々しさ。清らかなのびくした圓い腕。肢體を包んで靜に垂直に垂れた衣。さうして柔かな無限の慈悲を湛へてゐるやうなその顔。——そこにはいのちの美しさが、波の立たない底知れぬ深淵のやうに、しづかに凝止してゐる。それは表に現はれた優しさの底に隠れる、無限の力強さである。人間のあらゆる尊さ美しさは、間髪を容れず、人間の肉體によつて現され、直ち

美しさ(美しさ) 間髪を容れず(間髪を容れず) 肉體の肉體(肉體の肉體)

法隆寺壁畫の
一部

この身云々
維摩經の語
イマヤチ



見る、この身影の如し、業縁より見るといふが如き人身の無常は、本來清淨なる人間の「心性」によつて打克たれ、そこには永遠なるいのちの「佛」の象徴を實現してゐるのである。

人間が幼稚であり素朴であつた故に、この美を受容する事が困難であつたと考へてはいけない。素朴な心は、解釋において單純

に逆に、人間の肉體を人間以上の神々しい清らかさにまで高めてゐる。それは自然に即して、しかも自然の奥祕を掘出したものである。肉體のはかなさは、例へば、5月16日 土、この身泡の如し、久しく立つを得ず、この身幻の如し、顛倒よりおこる、この身夢の如し、虚妄となりて

であり、省察に於て粗雑であるが、その本能的な直覺に於ては、内生の雑駁な統一の力の弱い文明人より遙に鋭いのだ。恐らく、美に對するその全存在的な感激に於て、當時の我々の祖先は、その後のどの時代の子孫よりも優つてゐただらう。彼らを新しい運動に引入れたのは、確に藝術的魅力であつたに相違ない。さうしてこの感激が、彼らの生活全體を更新しないでは已まない力となつたに相違ない。これは私の推測である。然しこの推測なくしては、私は古代の藝術をも文化をも解する事が出来ない。(偶像再興)

三

この國

上宮五の

上宮王
聖徳太子

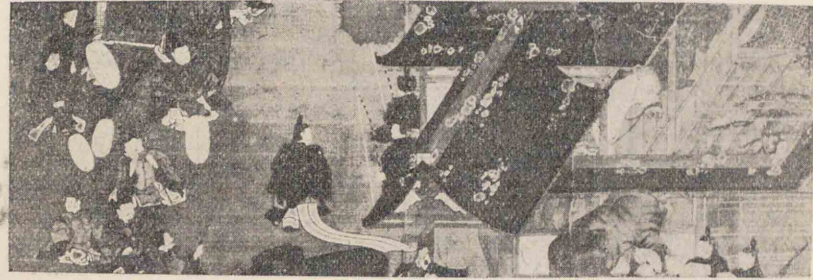


上宮五の

斑鳩の宮

5月23日
L L

上宮王七歳の
像(大和法隆
寺什物)



七
いかるがの宮



二六

夏は今感なり

古きあ

あとどろろ

カケル
陽炎

我は立ちむかしりのへ

白き日のかりるる照れの中に

まはるるま

Kakoda

Iwa ken

Iwaasaki
Iwaasaki

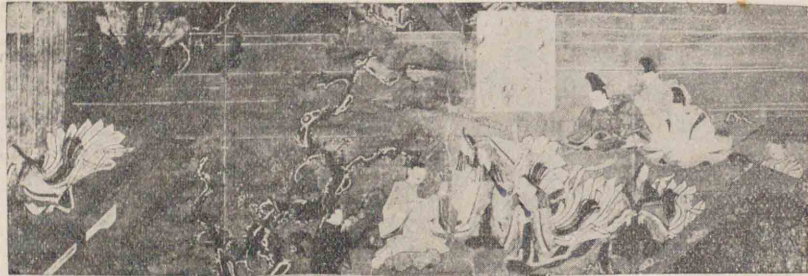
岩崎建一

徳山次郎

聖徳太子

聖徳太子畫傳

覺賢慧慈
高麗の人
推古天皇時代
來朝



七
いかるがの宮

まだ稚き若葉の文明日本に

吹きめぐる西域のかをりけ

わけらけき詩の佛陀を

雪とたたかたはるせぬ

山下平伍郎 山口村 十日

日出づる夏の天子 在 岩崎建一

日没する夏の天子に

まを波すと

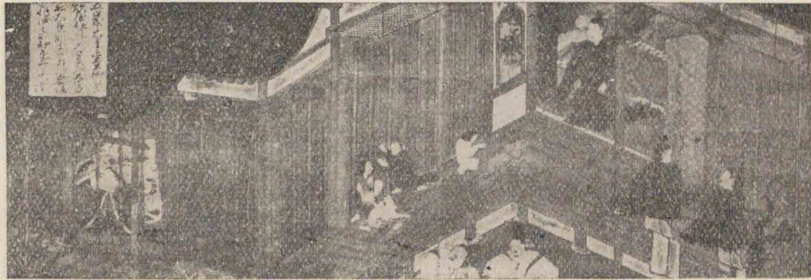
かの太子は宮とすかごまかに玉使を

覺賢や慧慈等の聖徳は

衣を凝てきたり

藝術興り文明す

三九



憲法十七條改を等りす

美しき法隆寺は

千三百年の昔に建ちけりし

鳴呼巨匠の日本にありしを

僧伽蓮摩 寺院

藍摩

見了秋が 見了秋が

涙をながす

東天の菩薩太子

君がせし功績のあとを

やまとの國

無
有
無
有
無
有

無
有
無
有
無
有
無
有
無
有



八 言を以て交はる

瀧澤 馬琴

野生近年多病そのうへ氣力も衰へすべて筆不精なり。
渡世の著述も十年前の半もはかどり申さずとかく筆と
り候事懶く心の進み候ふ日は僅かにてくらし候仕合に
御座候へども御深志殊に厚き御贈物等受けながら何も
返禮可致存じつきも無之、遠方の事せめて文通なりとも
御面會同様に委しく認め候うて疎略なき寸志を表し申

八 言を以て交はる

カ、假令
カ、假令
カ、假令

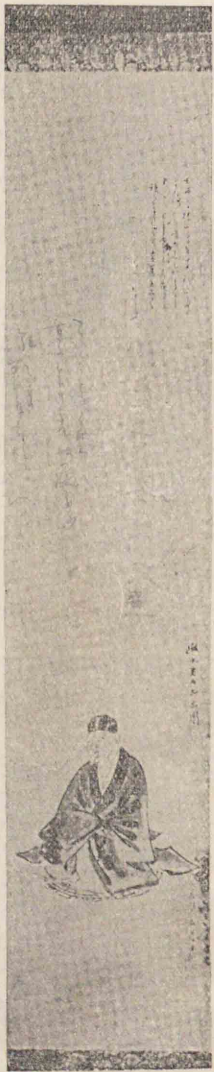
御厚志
御厚志

5/26

すべしと、力めてかく長々しく書きつらね御覧に入れ申候。假令御面談致候ふとも、此上はあるまじくと存候。面談にては申しおとす事もあり、聞きもらす事もあり、又聞きて忘るゝ事もある、かく書きつけたるには漏るゝ事もなく、聞きて忘れ給はば又御覧せんに便宜なるべし。これ野生が萬分の謝儀のその一つと御覧下さるべく候。外に何も御答禮不仕候。義を以て交はるを上とす、言を以て交はるをその次とす、酒食を以て交はるを又その次とす、財利を以て交はるを下とす。君と我は言を以て交はるものか。さりながら自負に似たり。多罪々々。御厚志の御答禮に、芭蕉の畫像をゑがかせ、拙筆にて贊をいたし進上可仕哉と存候ひしが、また思ふには、貴兄俳諧

宗伯號は翠嶺

芭蕉の像
(渡邊華山筆)



御熱心なるが上に、畫もよくなされ候ふ御様子也。此方にてかゝせ候繪御氣に入り申すべきか、はかり難く候。その上、御このみもなきに、度々拙作を呈し候事失禮也。いつそ何も進上せぬ方よかるべしと存じ、まづその事はさし控へ候へども、初一念を申さぬもいかげゆる申候。芭蕉の贊は作りおき申候。御用に立ち候はば、何時なりとも仰せらるべく候。華山と申す唐繪かき、伴同門にて、ことの外畫執心の仁也。この仁へ畫をたのみ、芭蕉の像

八言を以て交はる

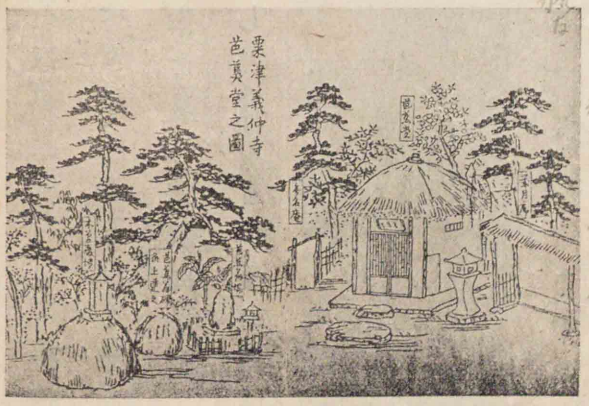
義仲寺
近江國栗津
杉風
杉山氏
芭蕉の高弟
(享保十七年歿)

今朝
文政元年五月
十七日

芭蕉堂

は粟津義仲寺藏版杉風が筆の肖像をかゝせ可申哉と存候ひしが蕉翁の畫像御所持ならばそれも無益也。よりて差控へ候。しかれども世上普通の口誼決して當座の輕薄には無之候。

今朝四時過御狀居きそれより思ひおこしこの一綴認めかゝり候處今日は五月雨にて客は只一人ありしが悴に挨拶いたさせ只今申の刻に至りやうく認め終り申候。さりながら御返事申しおとし候事もあるべし。尚また思出しあとよりゆるく貴意を



ヨイカ

瀧澤馬琴
馬琴屋敷趾の
井戸

得べく候。

(與鈴木牧之書抄錄)

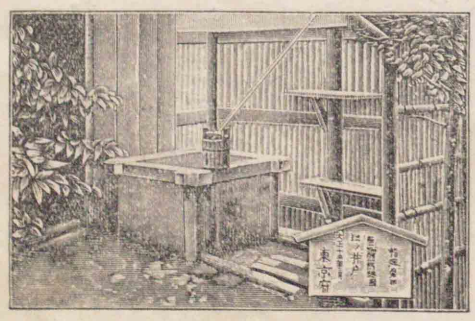
九 馬琴と華山

芥川龍之介



そこへ久しぶりで華山渡邊登がたづねて來た。羽織袴に紫の風呂敷包を小脇にしてゐる所では、これは大方借りてゐた書物でも返

しに來たのであらう。馬琴は喜んでこの親友をわざ／＼立關まで



九 馬琴と華山

迎へに出た。

「今日は、拜借した書物を御返却旁、御目にかけたいものがあつて
参上しました。」

崑山は書齋に通ると、はたしてかういつた。見れば風呂敷包の外
に、紙に巻いた繪絹らしい物を持つてゐる。

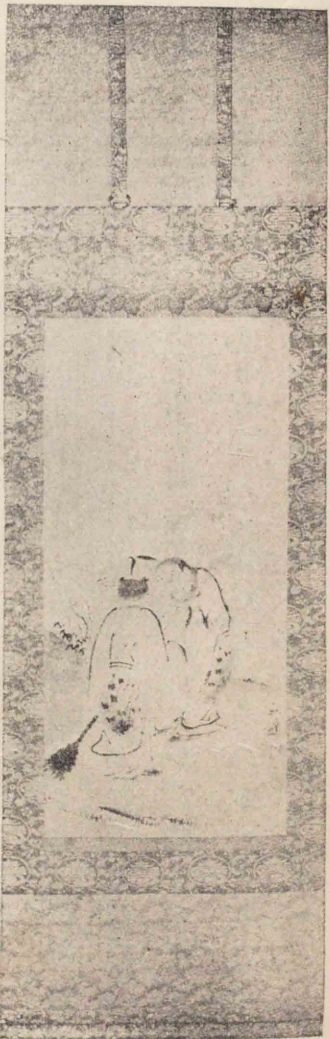
「御暇なら一つ御覽を願ひませうかな。」

「お、早速拜見ませう。」

崑山は或興奮に似た感情を隠すやうに、稍わざとらしく微笑み
ながら、紙の中の繪絹を披いて見せた。繪は蕭索とした裸の樹を
遠近にまばらに描いて、その中に、掌を拍つて談笑する二人の男を
立たせてゐる。林間に散つてゐる黄葉と、林梢に群つてゐる亂鴉
と、――畫面のどこを眺めても、うす寒い秋の氣が動いてゐない所
はない。馬琴の眼は、この淡彩の寒山・拾得に落ちると、次第にやさ

寒山・拾得
支那唐代の隱士

寒山・拾得



しい潤を帯びて輝き出した。

「何時もながら結構なお出来ですな。私は王摩詰を思出します。」

『食隨鳴磬巢鳥下、行踏空林落葉聲』といふ所でせう。

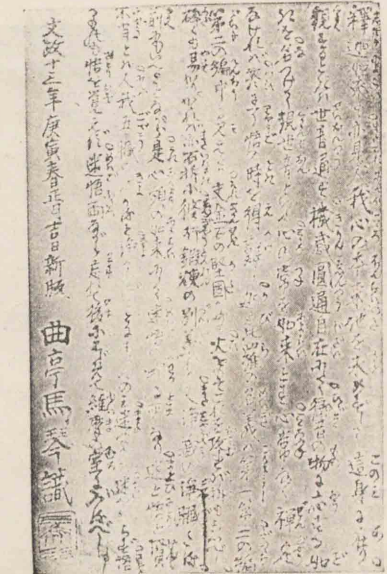
「これは昨日描きあげたのですが、私には氣に入つたから、御老人
さへよければ差上げようと思つて、持つて來ました。」

崑山は、鬚の痕の青い頰を撫でながら、満足さうにかういつた。
「勿論氣に入つたといつても、今まで描いた物の中ではといふく

王摩詰
王維字は摩詰
支那唐の詩人

らゐな所ですが、——とても思ふとほりには、何時になつても描
けはしません。」

「それはありがたい。何時も頂戴ばかりしてゐて恐縮ですが。」



馬琴は繪を眺めながら、呟くやうに禮をいつた。未完成のま
まになつてゐる彼の仕事の事
が、この時彼の心の底に、何故か
ふと閃いたからである。が、崑
山は崑山で、やはり彼の繪の事
を考へつゞけてゐるらしい。

「古人の繪を見る度に、私は何時も、どうしてかう描けるだらうと
思ひますな。木でも石でも人物でも、皆その木なり石なり人物
なりに成りきつて、しかもその中に描いた心持が悠々として生

馬琴の原稿

きてゐる。あれだけは實に大したもの。まだ私などはそ
こへ行くと、子供ほどにも出来て居ません。」

「古人は、後世恐るべしといひましたがな。」

馬琴は、崑山が自分の繪のことばかり考へてゐるのを、妬ましいや
うな心持で眺めながら、何時になくこんな諧謔を弄した。

「それは後世も恐しい。だから私どもは、唯古人と後世との間に
挟まつて、身うごきもならず、に押され、進むのです。尤もこ
れは、私どもばかりではありません。古人もさうだつたし、後
世もさうでせう。」

「如何にも、進まなければ、すぐに押倒される。すると先づ一足で
も進む工夫が、肝腎らしいやうですな。」

「さやう、それが何よりも肝腎です。」

主人と客とは、彼等自身の語に動かされて、暫くの間口をとざし

た。さうして二人とも秋の日の静かな物音に耳をすました。

「八犬傳は、相變らず抄がお行きですか。」

やがて華山が、話題を別な方面に開いた。

「いや一向抄どらんで仕方がありません。これも古人には及ばないやうです。」

「御老人がそんな事をいつては困りますな。」

「困るのなら、私の方が誰よりも困つてゐますよ。併しどうして

も、これで行けるところまで行くより外はない。さう思つて、私

はこの頃八犬傳と討死の覺悟をしました。」

かういつて、馬琴は自ら恥づるもののやうに苦笑した。

「たかが戲作だと思つても、さうはいかない事が多いのですね。

それは私の繪でも同じ事です。どうせやり出したからには、私

もいけるところまでは行きたいと思つてゐます。」

「お互に討死ですか。」

二人は、聲を立てて笑つたが、その笑聲の中には、二人だけにしかわからぬ或寂しさが流れてゐる。と同時に、又主人と客とは、ひとしくこの寂しさから、一種の力強い興奮を感じた。(傀儡師)

一〇 芳流閣

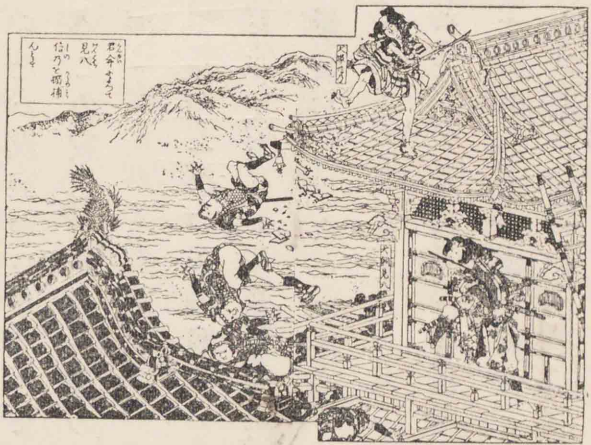
瀧澤 馬琴

エ
南子

禍福云々
漢書賈誼傳の
語

古の人謂はずや、禍福は糾へる繩の如しと。人間萬事往くとし
て、塞翁が馬ならぬはなし。それは福の倚る所、はた禍の伏す所、彼に
あれば此にあり、とは思へども豫てより、誰かよくその極を知らん。
憐むべし、犬塚信乃は、親の遺言記念の名刀、心にしめつ身につけつ、
艱苦の中に年を経て、得難き時を得てしかば、はるく古河へ齎し
て、名を揚げ家を興すべかりし、その福は禍と、ふりかはりたる村雨
の、刀は舊のものならで、わが身を、劈く響とをなりし、憾をこゝに釋

八犬傳原本
挿繪



くよしもなく、猝急にして意外にあり。讒に當座の辱を避けばやとおもふばかりに、夥多の圍を切開きて、芳流閣の屋の上に攀ぢ登れども、とにかくに脱れ去るべき道のなれば、其處に必死を窮めたる、心の中はいかなりけん、想ひやるだにいと痛まし。

されば又犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舎に繋がれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀、犬塚信乃を搦めよとて、怒に擇み出されつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられんこと、願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあら

成氏
足利持氏の子
鎌倉管領

ぬ、君命重く彌高き、彼の樓閣は三層なり。その二層なる屋の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へがたき、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の、饑熱をわたる數瓦は、うねり隙なく波に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に入る流は、名に負ふ阪東太郎、水際の小舟楫を絶え、進退既に谷まりし、敵にしあれば、いかでわれつなぎとめんと、颯の樹傳ふ如く、さらさらと登りはてたる三層の屋根には、まぶしさすよしもなく、かたみに隙を窺ひつゝ、にらまへあうて立つたる有様、浮圖の上なる、鸛の巢を、巨蛇の狙ふに似たりけり。

廣庭には成氏朝臣横堀史在村等の老黨、若黨圍繞せし、床几に尻を打掛けて、勝負いかにと見上げたり。また閣の東西には、腹巻したる許多の士卒、槍長刀を晃かし、或は箭を負ひ、弓杖つき立て、組んで落ちなば、撃ちとめんとて、項を反らしてこれを觀る。しかのみ

墨氏

名は翟

魯般

周代の學者

魯般

周代の魯の人

ならず外の方は、連綿として杳かなる、河水遠りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲の梯なれば、地上に下るべくもあらず。渠、鳥ならねど羅に入りぬ、獸ならねど狩場にある。三寸息絶ゆれば、絆みな休まん。脱れ果てじと見えたりけり。

そのとき、信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで、追ひのぼらんとせし兵等を、斫りおとしつるその後は、絶えて近づく者なきに、今唯一人登りきぬるは、よに覺ある力士ならん。きやつはこれ膳臣巴提便が虎を暴にする勇あるか、又富田の三郎が鹿の角を裂きたる力あるか。遮莫一箇の敵なり。引組んで刺しちがへ、死するに難きことやはある。よき敵ござんなれ、目に物見せんと血刀を、袴の稜もておし拭ひ、高瀬の如き方棟に、立つたるまゝに寄するを待て

膳臣巴提便

欽明天皇の朝

の勇者

富田三郎

和田義盛の臣

ば、見八も亦思ふやう、かの犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり。さりとても搦めかねて、他の援を借ることあらば、獄舎の中より此の役儀に、擇み出されしかひもなし。からめとるとも撃たるとも、勝負を一時に決せんものと思ひたれば、ちつとも擬議せず。御錠ざふと呼びかけて、もつたる十手をひらめかし、飛ぶがごとくに方棟の、左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せつけず。「心得たり」と、鋭き太刀風に、撃つをはつしと受留めて、拂へばすかさず切りこむ刀尖さゝへて流す一上一下、すべる藁を踏みとめて、しきりに進む捕手の秘術、かなたもおとらぬ手練の働、嵩よりおとす太刀筋を、あちこち外す虚々實々、いまだ勝負をわかざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざるものなく、また、きもせず氣を籠めて、見るめもいとゞはるかなり。さる程に犬塚信乃は、侮り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、

思へば勇氣いやまして、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音かけ聲、兩虎深山に挑むとき、颯然として風發り、二龍青潭に闘ふ時沛然として雲起るもかくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹か、と見るばかりなる、いと高き屋の棟の上に、死を争ひし爲體、よに未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎖肱當のはづれを、裏かくまでにきり裂かれしかど、太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續かではじめに淺痕を負ひしより、次第に疼を覺ゆれども、足場を守りて撓まず去らず、たゞみかけて撃つ太刀を見八右手に受流して、かへす拳につけ入りつゝ、やつとかけたる聲と共に、眉間を望みて、礮と打つ、十手を丁と受けとむる、信乃が刃は鏢際より折れてはるかに飛びうせつ。見八得たりとむづと組むを、そがまゝ左手にひきつけて、かたみに利腕しかと執り、ねぢ倒さんとえいごゑあはせて、揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しくふみすべらして、河邊の

方へころ／＼と身をころばしし覆車の俵坂よりおとすに異ならず。勾配けはしき棧閣に、削りなしたる藁の勢とゞまるべくもあらざれど、かたみに執つたる手を緩めず、幾十尋なる屋の上より、する遙かなる河水の底には入らで程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、うちかさなりつゝ、どうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙、纜ちやうと張りきつて、射る矢の如き早河の、直中へ吐出されつ。しかも追風と退く潮に、誘ふ水なるくだり舟、行方も知らずなりにけり。(南總里見八犬傳)

一一 奥の細道

松尾芭蕉

首途

月日は百代の過客にして、往きかふ年もまた旅人なり。船の上
に生涯を泛べ、馬の口捉へて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を棲

去年
元祿元年

芭
蕉

處とす。古人も多く旅に死せるあり。

予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神のまねきにあひて、取るもの手につかず、股



引のやぶれを綴り、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移る。

草の戸も

彌生も末の七日、曙の空おぼろくとして、月は有明にて光をさ

まれるものから、富士の嶺かすかに見えて、上野谷中の花の梢、またいつかはと心細し。睡じき限は宵より集ひて、船に乗りて送る。千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思、胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそゞぐ。

行く春や鳥啼き魚の眼は泪

これを矢立のはじめとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚たゞ假初に思立ちて、吳天に白髪の恨を重ぬといへども、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばと、さだめなき頼の末をかけ、其の日漸く草加といふ宿にたどり着きにけり。瘦骨の肩にかゝれるもの、まづ身を苦しむ。たゞ身すがらにといでたてるを、紙衣一具は夜の防ぎ、浴衣・雨具・墨筆の類、あるはさり難き贖などしたるは、さすがに打捨てがたくて、

路次の煩となれるこそわりなけれ。

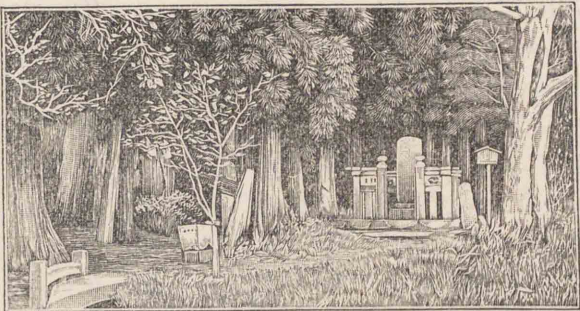
白河の關

心もとなき日數かさなるまゝに、白河の關にかゝりて旅心さだまりぬ。「いかで都へ」と、便求めしも理なり。中にもこの關は風騒の人心をとゞむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裳を改めし事など、清輔の筆にもとゞめ置かれしとぞ。

曾良

鹽釜松島

鹽釜の浦に入相の鐘を聞く。五月雨の空いさゝか晴れて、夕月



白河の關趾

いかで都へ
たよりあらば
いかで都へつ
げやらん今日
白河の關は越
えぬと
平兼盛(拾遺
集)

清輔

藤原氏

二條天皇時代

の歌人

曾良

芭蕉の門人

河合氏

同伴者

綱手かなしも
みちのくはい
づくはあれど
鹽釜の浦漕ぎ
舟の綱手かな
しも(古今集)

和泉三郎
燈籠の銘



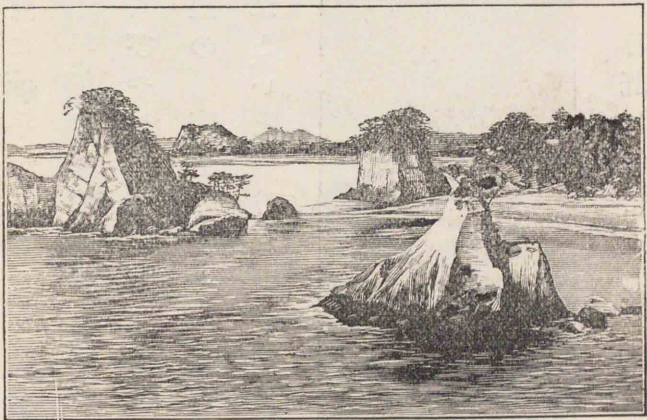
日既に午に近し。船をかりて松島に渡る。その間二里餘、雄島の磯に着く。

三年和泉三郎寄進とあり。五百年來の面影いま目のまへにうかびて、そゞろにめづらし。

浙江
一名錢塘江
(支那浙江省)

松
島

雲居
瑞巖寺中興の
祖



石などあり。松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落穂・松笠など

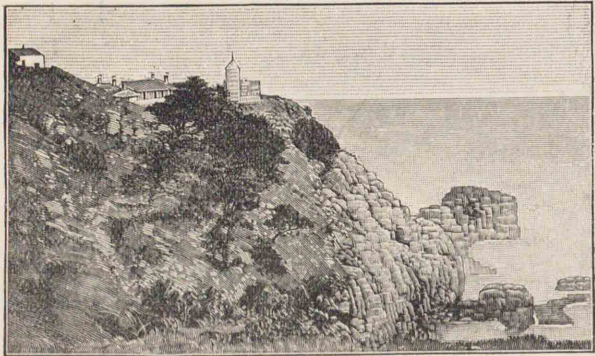
抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に耻ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數をつくして、敬つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。或は二重にかさなり、三重に疊みて、左にわかれ、右に連なる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するがごとし。千早振神代の昔、大山祇のなせる業にや。造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ、詞をつくさん。

雄島が磯は地續にて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室のあと、坐禪島なり。世を厭ふ人も稀々見えて、落穂・松笠など

平泉

十二日平泉へと志す。聞傳へたるあねはの松・緒絶の橋など人跡稀に、雉兔・芻蕘の往きかふ道そこともわかず。終に道ふみ違へて、石の巻といふ湊に出づ。『黄金花咲く』と詠みて奉りたる金華山海上に見渡され、數百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひて、竈の煙立續きたり。思ひかけずかゝる處にもきたれるかなと、宿からんとすれば、更

打煙りたる草の庵のどかに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづ懐しく佇む程に、月海に映りて、晝の眺また改まりぬ。江上に歸りて宿を求め、風雲の中に旅寢すること、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。



黄金花咲く
すめろぎの御
代祭えむとあ
づまなるみち
のく山にこが
れ花さく
(萬葉集)

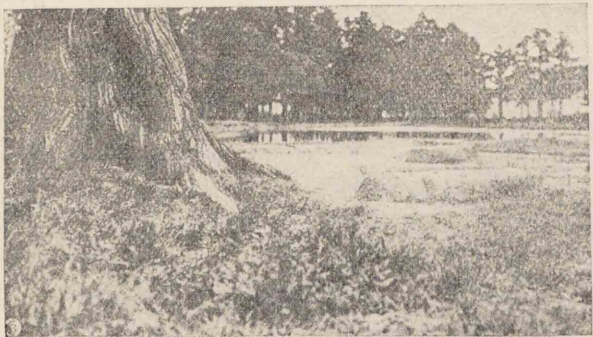
十二日
元祿二年五月

金華山

三代
清衡基衡
秀衡藤原氏

大 門 跡

泰衡
秀衡の子

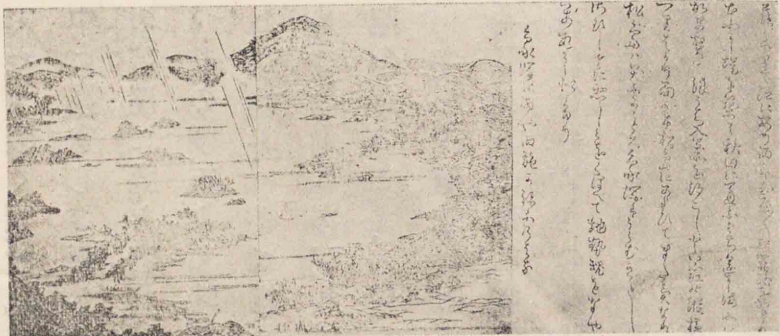


に宿かす人もなし。漸く貧しき小家に一夜をあかして、あくれば
また知らぬ道迷ひゆく。袖の渡尾駁をぶちの牧真野の萱原などよそめ
に見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼に
そうて、戸伊摩といふ處に一宿して、平泉に
到る。其の間二十餘里ほどとおぼゆ。

三代の榮耀一炊の夢にして、大門の跡は
一里此方にあり。秀衡が跡は田野になり
て、金鷄山のみ形を残す。まづ高館に上れ
ば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川
は泉が城を繞りて、高館の下にて大河に落
入る。泰衡が舊跡は、衣が關を隔てて南部
口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さて
も義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。「國破れて山

國破れて
「國破山河在、
城春草木深」
(杜甫)

(上)象潟(芭蕉
翁繪詞傳挿繪)
(下)高 館



河あり、城春にして草
青みたり」と笠打敷き
て、時の移るまで涙を
おとしぬ。

夏草やつはもの

どもが夢の跡

象 潟

江山水陸の風光數
をつくして、いま象潟
に方寸を責む。酒田
の湊より東北の方山
を越え、磯を傳ひ、砂を
踏みて、其の間十里、日



影や、傾く頃、汐風眞砂を吹上げ、雨朦朧として鳥海の山隠る。闇中に摸索して雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色亦たのもしと、蟹の苦屋に膝を容れて、雨の霽を待つ。

其の朝、天よく晴れて、朝日花やかにさし出づるほどに、象潟に舟をうかぶ。まづ能因島に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、むかひの岸にあがれば、「花の上漕ぐ」と詠まれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。

寺を干満珠寺といふ。此の寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさへ、其の影映りて江にあり。西はむやゝの關路をかぎり、東に堤を築きて、秋田に通ふ道はるかに、海北に構へて、浪うち入るゝ處を汐越といふ。江の縦横一里ばかり、おもかげ松島に通ひてまた異なり。松島は笑ふがごとく、象潟はうらむがごとし。寂しさにかなしみを加へて、地勢魂をな

花の上漕ぐ
きさがたの櫻
は波にうづも
れて花の上こ
ぐあまのつり
舟(西行法師)

やますに似たり。(奥の細道)

一二 複雑と單純

鳥崎 藤村

生活の内容が複雑であれば、随つてその人の書かうとするものは、複雑な氣持に適した形式を取るやうになる。これは一應尤もらしくきこえる言葉だ。これを詩歌の歴史にあてはめて見ると、われらの生活の内容は、それほど複雑なものではない。だから、和歌といひ俳句といふやうな單純な詩形が、他の國に類のないやうな短い詩の形が、發達したのだといふことになる。ところが、私は、近頃これと反對なことを胸にうかべるやうになつた。

われらは單純だらうか。どうして、われらの生活の内容ほど複雑なものはあるまい。長いことこの島國に立籠つて來たことが、

こんななわれらの生活を複雑にしたのであらうか。われらが日常心に經驗することは、あまりに複雑で、窮屈で、蔭日向が多過ぎる。とてもわれらが心に經驗することを、單純な言葉で言ひあらはすことは出来ないやうな氣がする。

われらの複雑な性質を證據立てるに、好い一つの例が、自分の胸にかんで來た。われらは遠まはしにこそ親を愛し、兄弟を愛し、妻を愛し、友達を愛するとは言へるが、それらの人達に面とむかつて、一語愛するといふ言葉を持たない。われらの生活の内容は單純なものではなくて、寧ろそれほど複雑なのだ。

そこで私は、詩歌の上に立ちかへつて、吾が國に極く單純な詩形が發達して來たといふのは、われらの心に經驗することが、あまりに複雑であるからではないかといふ疑問をおこして來るやうになつた。

和歌なり俳句なりの英譯を讀んで見ると、いかにわれらの複雑な心が、あの短い詩形に織込まれて居るかがわかる。和歌や俳句の英譯ほど、原詩に遠い感じのするものはない。

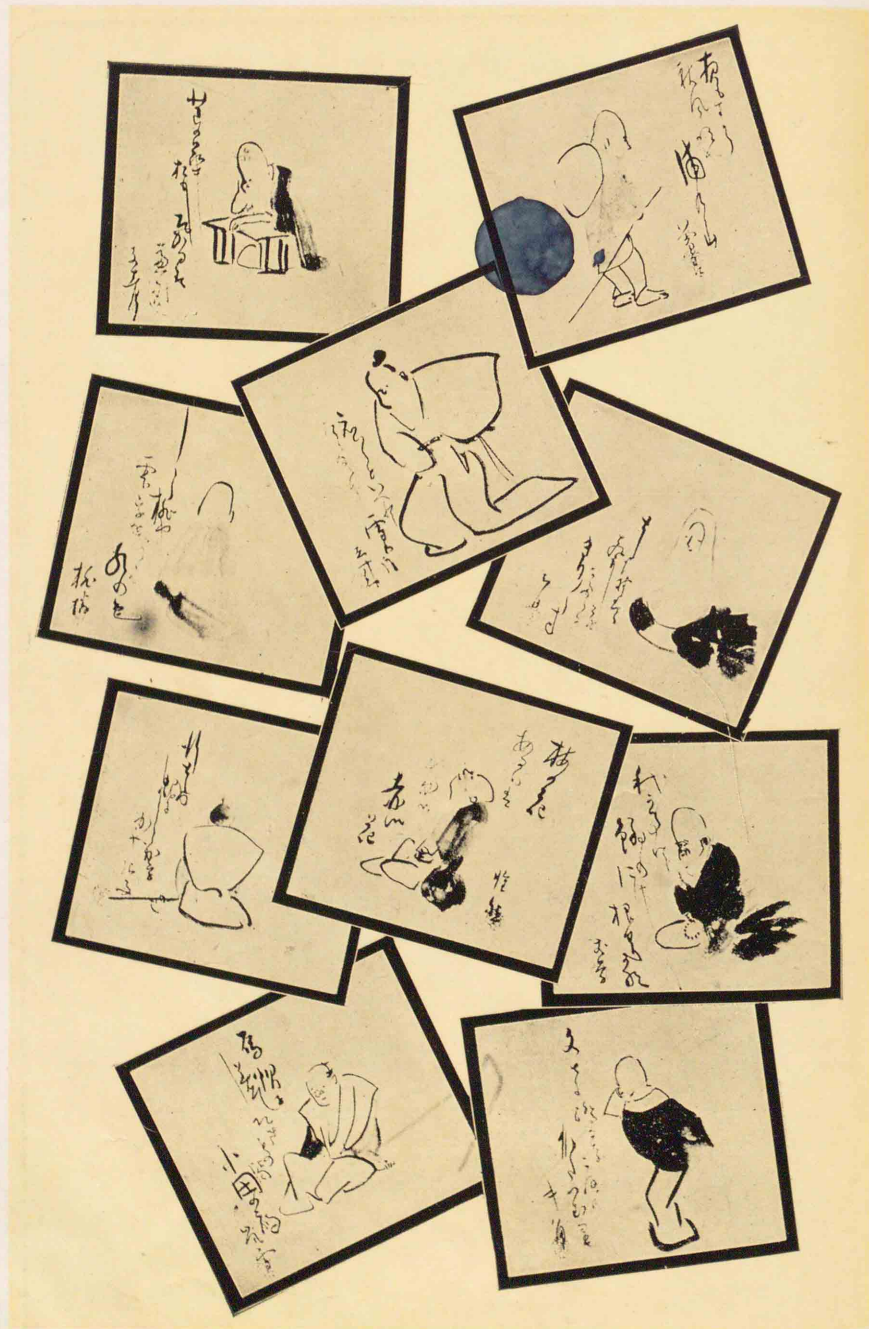
これは譯者の罪に歸すべきものだらうか。それほど、われらの用ふる言葉は、單純でないことを證據立てるのではあるまいか。

私は、詩歌としての形の短く單純なのを、好いとか悪いとか言ふつもりではない。唯、その裏にある心持の複雑なのに思ひ到つたまでだ。

梅若菜
芭蕉の句

梅若菜まりこの宿のとり、汁

何程の旅情、友愛、宗教的な情緒、動搖に安座する飄泊者の心などが、この短い言葉のかげに隠されてあるだらう。言ふことがなくて、こんな短い言葉になつたとしても考へるものがあらば、——東西の詩歌を比較して、この短い言葉を詩想の貧しさに歸するもの



(筆山巖邊渡)

蕉門十哲

秋来ぬと目には
さやかに見ゆるわかし

兼ほして朝々ふるふほたるかな

風の音も
おぼろる水ぬよ

みづうみの水まさりけり五月雨

牛呵るこゑに鴨たつゆふべかな

はつ雪やふところ子にも見する母

萍やけさはあちらの岸に咲く

支考
各務氏
號獅子庵
蕉門

支考筆蹟

乙由
中川圖書

ふゆのや
4
かきつばたのし
まき

嵐
雪

去
來

支
考

杉
風

乙
由

乙由筆蹟

丈草
内藤林右衛門
蕉門

北枝
立花次郎右衛門
蕉門

希因筆蹟

希因
綿屋彦右衛門
號暮柳



丈草

幾人か時雨駈けぬく瀬田の橋

北枝

来る秋は風ばかりでもなかりけり



希因

名月や風さへ見えて花すゝき

一三 蟬の聲

多学期本試験以上

七三

九折の道



紅葉はその號
小説家
(明治三十六年
歿 年三十七)

一四 鹽原

尾崎 紅葉

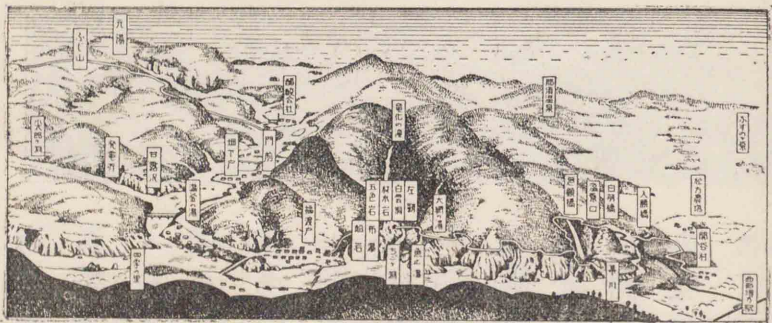
車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改まれど、我は安からざる悒鬱を抱きて、やる方なき五時間のひとりに倦疲れつゝ、はじめて西那須野の驛に下車せり。

直ちに西北にむかひて、今なほ茫々たる古の那須野が原に入れば、天は闊く、地は遐に、たゞ平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帯の重巒、鹽原はそこぞと見えて行くほどに、路は窮まらず。漸く千本松をすぎ、進みて關谷村に至れば、人家の盡くるところに、淙々の響ありて、これにかゝれるを入勝橋となす。

橋を渡りて、僅に行けば、日光暗く、山厚く疊み、嵐氣冷に、壑深く陥りて、いくめぐりせる九折の後には、密樹聲々の鳥啼き、前には幽草歩々の花をひらき、いよゝ登れば、遙に木がくれの音のみきこえ

九折の道

鹽原の全圖



し流の水上は、淺く見えて、すはや、こゝに空山の雷、白光を放ちて崩れ落ちたるかとすさまじかり。道の右は山を削りて長壁となし、谷幽に蘚碧にして、幾條ともなく白絲を亂しかけたる細瀧、小瀧の珊々として灑げるは、嶺上の松の調も、定めてこの緒よりやと見すてがたし。

白羽阪を踰えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑をふみて、山中の景は始めて奇なり。これより行きて、道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全逕にして三十橋。山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あ

湖
川

箒
川

鹽原の奥
(山元春舉筆)



り、全村にして四十五湯。猶數ふれば十二勝十六名所、七不思議、一々探り得べくもあらず。

そも、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峰の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流に浜る片岨にして、いたる處巉巖の水を夾まざるなきは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。まづ大網の湯を過ぐれば根本山、魚止瀑兒が淵、左靱の嶮は古りて、白雲

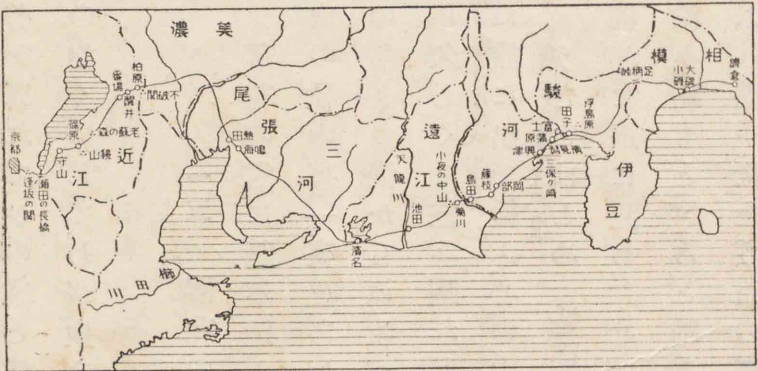


洞は朗に、布瀑龍が鼻材木石五色石船岩など眺めて行けば、鳥居戸前山の翠衣に染みて福渡戸の里に入るなり。

途すがら、前面の巖のところ／＼に咲き残りたる躑躅山藤など打眺めつゝ、行くほどに、鹽釜の湯甘湯澤小太郎が淵など、早くもすぎていつしか畑下戸の里につきぬ。

一村十二戸、温泉は五箇所湧きて、五軒の宿あり。清琴樓と呼べるは南に方りて、箒川の緩くめぐれる磧に臨めり。俯すれば水石の鄰々たるを見、仰げば西は富士喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤を落來る流は、二十丈の絶壁にかゝりて、素練を垂れたるごとき吉井瀑となり、東北は山又山を重ねて、

京都より關東への海道圖



いたくもる山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず。ものを思へば夜の間に、老會の森の下草に、駒をとめてかへりみる、故郷を雲や隔つらん。

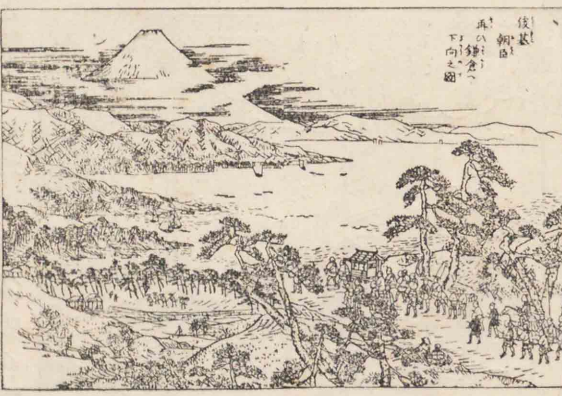
番場醒が井柏原、不破の關屋は荒れ果てて、なほもるものは秋の雨。いつか我が身の衣はりなる、熱田の八劍伏拜み、潮干に今やなるみ搦、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江濱名の橋の夕汐に引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰か哀とゆふ暮の、入相なる身入相なる身

し... 強健

7月2日

五 船中 湖

俊基鎌倉下向 (太平記圖會)
命なりけり
年たけてまた
ひきや命なり
けり小夜の中
山 (新古今集)



れば今はとて、池田の宿に着き給ふ。
元暦元年の頃か、とよ、重衡の中將の、東夷のために囚はれて、この宿に着き給ひける、その古のあはれまでも、思ひ残さぬ涙なり。

れば、がれいひまゐらす程とて、輿を庭前に昇きとゞむ。轅をた

光親卿
藤原氏
(歿年四十六)

たきて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり」と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎によりて、光親卿

關東へ召下されしが、この宿にて誅せられし時、

昔、南陽縣、菊水 汲下流而延齡

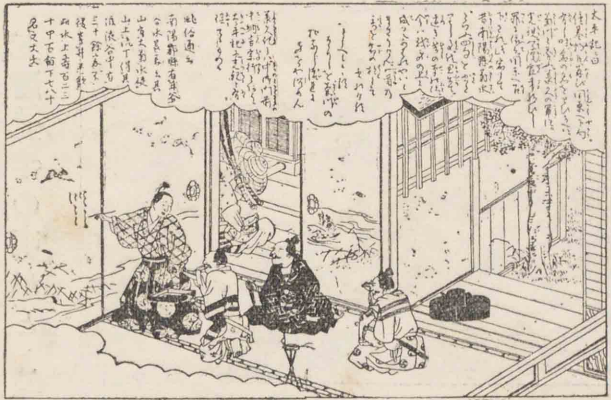
今、東海道、菊川 宿西岸而終命

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠みて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかゝるためしをきく川の

おなじ流に身をやしづめん

大井河を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の



菊川の宿
(大石眞虎筆)

山の花ざかり、龍頭鷄首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今はふたゝび見ぬ夜の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ。

島田・藤枝にかゝりて、岡べの眞葛うら枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、蔦楓いと茂りて道もなし。昔、業平の中將の、すみかを覓むとて、東の方へ下るとて、夢にも人にあはぬなりけりと詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

清見潟を過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、むかひはいづこみほが崎、興津・蒲原うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思にくらべつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、潮干や淺き船浮きて、おりたつ田子のみづからも、うき世をめぐる車がへし、竹の下道行きなやむ、足柄山のたうげより、大磯・小磯見下して、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮

夢にも人に
駿河なるうつ
の山べのうつ
つにも夢にも
人にあはぬな
りけり
(伊勢物語)

程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ。(太平記)

一六 不滅の光

佐々木信綱

時は夏のなかば、いやとこせ」と、長閑やかに唄ひつれ行くお伊勢詣の群も、春さき程には騒がしからぬ伊勢松坂なる日野町の西側、古本を商ふ老舗、柏屋兵助の店先に、「御免」というて腰をかけたのは、魚町の小兒科醫で、年の若い本居舜庵であつた。

舜庵は、醫師を業とはして居るものの、名を宣長というて、皇國學の書やら漢籍やらを常に買ふこの店の得意であるから、主人は笑ましげに出迎へたが、手をうつて、「あゝ、残念なことをしなされた。あなたがよくお名前をいつてお出になつた江戸の岡部先生が、お弟子と供をつれて、先ほどお立ちよりになつたに」と言ふ。舜庵は、「先生がどうしてこゝへ」と、いつものゆつくりした調子とは違つて、

あわたゞしく問ふ。

主人、何でも田安様の御用で、山城から大和とおまはりになつて、歸りに参宮をなさらうといふので、一昨日あの新上屋へおつきに
なつたところ、少しお足に浮腫が出
たとやらで御逗留、今朝はもうおよ
ろしいとの事で、御出立の途中を、何
か古い本はないかと、暫くお休みに
なつて、参宮にお出かけになりました。
た。舜庵、それは残念なことである。
どうかしてお目にかゝりたいが、
追



本居宣長と其の筆蹟

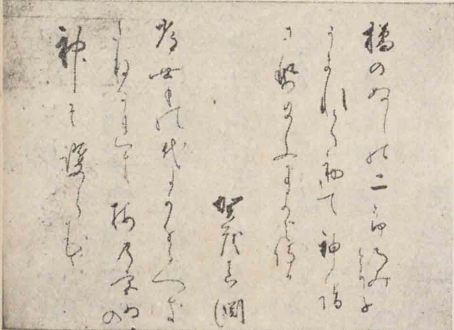
田安
田安宗武

付けませう」と主人がいふので、舜庵は一行の様子を大急ぎで聞きとつて跡を追つたが、どうもそれらしい人に追付き得なかつたの

賀茂真淵



真淵筆蹟
村田春郷
國學者
(明和五年歿)
春海
國學者
(文化八年歿)



で、すごくと我が家に戻つて來た。

數日の後、岡部衛士は神宮の參拜を濟ませ、二見が浦から鳥羽の日和見山に遊んで、夕暮に再び松坂の新上屋に宿つた。

「萬一かへりにまた泊られることがあつたらば、どうぞ知らせて貰ひたい」とたのんでおいた舜庵は、夜に入つて新上屋からの使を得た。樹敬寺の塔頭なる嶺松院の歌會におもむいて、今しもかへつて來た彼は、そのものもとりあへず旅宿を訪うた。同行の弟子の村田春郷は二十五、その弟の春海は十八の若ざかりで、早くも別室にくつろいでをつた。衛士はほの暗い行燈の下に

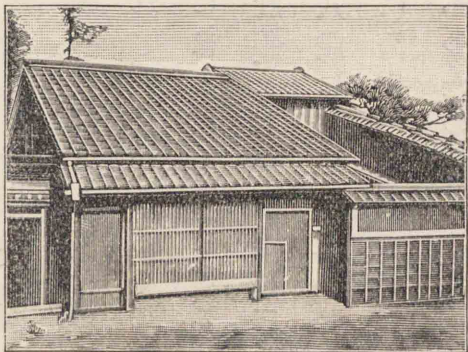
有徳公
八代將軍徳川
吉宗

舜庵を引見した。

賀茂縣主真淵通稱岡部衛士は、當年六十七歳、その大著なる冠辭考萬葉考なども既に成り、將軍有徳公の第二子田安中納言宗武の國學の師として、その名噴々たる一世の老大家である。年老いたれど、頗豊かなるこの老學者に相對して居る本居舜庵は、眉宇の間にほとばしつて居る才氣を、溫和な性格が包んで居る三十四歳の壯年。しかも彼は二十三歳にして京都に遊學し、醫術を學び、二十八歳にして松坂に歸り、醫を業として居たが、京都で學んだのは、當に醫術のみでない、佛契沖阿闍梨の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深かつたのである。

舜庵は、長い間欽慕して居た身の、ゆくりなき對面を喜んで、かねて志して居る古事記の註釋に就いて、その計畫を語つた。「我も固より神典を解き明らめんの志があつたが、それにはまづ漢意を清

本居宣長の家



登るがよい」と諄々として衛士が諭した。

夏の夜はまだきに更けやすく、家々から燈火の光も漏れぬ深夜

くはなれて、古のまことの意を尋ね得ねばならぬ。古の意を得んには、古の言を明らめ得た上でなければならぬ。故に、我は専ら萬葉を明らめて居た間に、既にかく年老いて、のこりの齡いくばくも無く、神典を説くまでに至ることを得ない。御身は年さかりに、ゆくさき長ければ、怠らず勤めなば、必ず成し遂げ得らるゝであらう。しかし、世の學に志す者、皆低い處を経ないで、すぐに高い處へ登らうとする弊がある。故に、低い處をさへ得る事が出来ぬのである。この旨を忘れず心にしめて、まづ低い處をよく固めおいて、さて高い處に

村田傳藏
眞淵の門人

に、老學者の言に感激して、面ほてりし若人は、闇夜の道のいづこを踏むとも覺えず、中町の通を西に折れ、魚町の東側なる我が家のくぐり戸を入つた。

舜庵は後に江戸に便を求め、翌十四年の正月、村田傳藏が中に入つて名簿をさゝげ、うけひごとをしるして、縣居の門人録に名を列ねる一人となつた。爾來松坂と江戸との間、飛脚の往來に、彼は問ひ、これは答へた。門人とはいへ、その相會うた事は、わづかに一度ただ一夜の物語に過ぎなかつたのである。

今を去る百五十餘年前、寶曆十三年五月二十五日の夜、伊勢國飯高郡松坂中町なる新上屋の行燈はその光の下に相語つたこの老學者と若人とを照らした。しかも、そのほの暗い燈火は、我が國文學史の上に不滅の光を放つてゐるのである。(賀茂眞淵と本居宣長)

の國のことをば知るべき」とて手をうちていたく笑ひつべし。

(玉勝問)

三 近き世

近き世、學問の道開けて、おほかた萬のとりまかなひ、さどく賢くなりぬるから、とりぐに新なる説をいだす人多く、その説よろしければ、世にもてはやさるゝによりて、なべての學者、いまだよくも整はぬ程より、我劣らじと世に異なる珍しき説をいだして、人の耳を驚かすこと、今の世のならひなり。その中には、随分によるしきことも、稀には出でくめれど、大方いまだしき學者の心はやりていひ出づることは、唯人にまさらん勝たんの心にて、輕々しくまへしりへをもよくも考へあはせず、思ひよれるまゝにうち出づる故に、多くはなかくなるいみじきひがごとのみなり。

すべて新なる説をいだすは、いと大事なり。幾度もかへさひ思

古事乃學能業乎波士乃能
始米伊刺奈比諸人乎教問坐
神留縣居能大人乃功者鷄鳴
東乃爾名迦迦勢留不盡乃
高嶺乃天曾曾理高伐智如攻
弥高尔仰登怒美他奉平
古事乃學乃祖登萬代尔言
經行年縣居能大人



淵 眞 茂 賀

ひて、よく確かなるより所をとらへ、何處までも行き通りて、違ふところなく、動くまじきにあらずば、たやすくはいだすまじきわざなり。その時にはうけばりてよしと思ふも、程経て後に今一度よく思へば、なほわるかりけりと、我ながらだに思ひならるゝこと、多きぞかし。(玉勝間)

四 昨日は

昨日は今日の昔にて、はかなくのみ過ぎに過ぎゆく世の中を、つくづくと思へば、あはれわが世も幾程ぞや。手を折りて數ふれば、はやみそぢにもあまりにけり。命長くて七十八生けらんにてだに、早くなかばは過ぎぬるよと思へば、まだ世ごもれるやうなる身も、ゆくさきほどなき心地のして、心細くぞおぼゆる。

かくのみはかなく、心なき木草鳥獸のおなじつらに、何すとしもなくあかしくらしつゝ、生けるかぎりの世をつくして、徒に苔の下

に朽ち果てなんはいとくち惜しくいふかひなかるべき事と思ふにもよろづにいたり少なく拙き身（いふまゝ）にあれば何事をし出でてかは世の人にもかかずまへられなからん後の世に朽ちせぬ名をだにとぞめましといとゞ人に似ぬおろかさへ取りそへてぞ悲しく心憂かりける。さりとはた身をえうなきものにはふらかし果つべきにしもあらず。かくのみ拙く愚かなる心ながら何業にまれ怠りなくわざと心に入れて勉めたらんには遂にはひとつゆゑづけてなのめにし出づるふしなどもなごかは無からんとあいなだのみにかゝりてなん。（玉勝間）

中二期以上



元田作之進

一八 直覺力

元田作之進

普江戸に大岡越前守といふ町奉行があつていかなる難事件も、
亂麻を断つが如く判決を下し、冤を雪ぎ曲を罰して、江戸の安寧を

立教大學學長
宗敎家
（昭和三年四月
歿年六十八）
大岡越前守
名忠相
（寶曆元年歿）

維持してゐたといふので、名奉行の名今に輝いて居る。さて、この奉行の事件を裁判するや、今日の如く細大洩らさず證據物件を集めて、これに依つて推定を下すといふのでなく、多くは自己の秀拔なる直覺力を用ひて、判断を與へたのであるが、それが不思議にもよく的中して、誤らなかつたといふのである。

我が國民は、悉く大岡越前守のやうな鋭敏な直覺力を有してゐるとはいへぬが、他國民に比して概して多量にこの力を有してゐる。人の性質を判断するにも、事實上の證明なくて、よく正直であるとか、臆病であるとか、陰險であるとか、判定を下すもののあるのを見る。當らないこともあらう、又その過誤の爲に、自他の不利をきたすこともあらうが、形に依らず、事實に依らずして、直ちに人の精神性質を感知する力は、確に我が邦人の秀でた一特徴である。外國人ならば、一から十までいはなければ判らぬ事も、日本人なら

ば、五までいへば直ちに了解してくれる。「聞一知十」とか「以心傳心」とかいふやうなもので、少しの暗示によつて直ちに事物の全部を見る力を持つてゐるのは日本人である。これには固より多くの危険も伴なふが、これを活用し、又適當に養成すれば、大いに益あるものである。

この直覺力は、我が國民をして神祕的（人間的な力、神聖な力、神秘的な力）ならしめてゐる。何等科學的推究に依らずして、直接に或眞理に到達し、或精神に接觸し、また或事物を感知するものがある。古來佛教の大知識などには、この種の人物が多くあつた。今日でも自ら豫言者と稱し、何々の權化と稱するものもあり、又夢中に何々の事を覺つたといひ、幻に何を見たといひ、見神といひ、靈感といひ、千里眼といふものがあるが、いづれもこの直覺力の發動であらう。これらの中には、眞偽固より混じてゐるであらうが、その眞面目なるものは、これに外なら

らぬと信ずる。

この直覺力は、また我が國民をして觀念者（少しも疑念なく、直観的に）たらしめてゐる。形に頼らずして、直ちに精神を洞見する風が、我が國民には多い。その最も著しいのは繪畫である。科學的思想を以てすれば、距離の遠近も正確でなく、物體の大小も平均を失してゐるのが、日本畫の常である。日本畫は畢竟一の暗示畫に過ぎない。この暗示畫を通じて、その裏面にある精神を味ははうとするのである。我が國の畫家は、僅かの間に走馬をゑがき、飛鳥をゑがく。かうして出來た畫は、固より形の上では、寫眞といはるべきものではないが、馬の精神、鳥の精神をば、あきらかに紙絹の上に表してゐる。花の畫でも水の畫でも、よし形は具らなくとも、氣韻がある、勢がある、精神の躍動がある。直覺力の勝れたものでなければ、かゝる畫は畫くことも出來ねば、鑑賞することも出來ない。

能もまたこの直覺力から出來て、直覺力に訴ふるものである。寫實的藝術の立場からみれば、その動作は、實際から甚だ遠ざかつてゐる。時所人の一致を缺いてゐる。併し、その不自然な動作の中に充滿した精神は、觀者に深い印象を與へる。これも寫實を尊ぶ歐洲の國民には、容易に理解の出來ぬ藝術である。和歌もまた觀念的國民の文學である。彼の僅少な文字を列ねて、深い意義と言ふに言はれぬ味とを含めてゐる。俳句に至つては、その極致を示してゐる。文字の數は和歌より更に小數で、意義と味とに至つては更に深い。我が國民の思想は、常に觀念の世界に逍遙してゐるから、花を見るとか、月を仰ぐとか、一寸した機さへあれば、忽ちそれが發動して和歌となり、俳句となり、繪畫ともなるのである。

和歌や俳句を外國語に譯したのもあるが、語を譯して、語の外



山本有子
現代の作家
伊藤一刀齋
伊豆の人

なる觀念を寫し得ないから、何れも原の味が失はれてゐる。主觀的精神があまりに偏重されると、科學的研究が怠られ、物質的方面が輕視されることもなる。しかしながら、科學や物質は、世界の風潮と共に、我が國にも自然に發展するであらうから、むしろ我が國民は、國民性の一特徴たるこの秀拔な直覺力を維持し、かつ改善し發展せしめて、その力を各方面に發揮させることが肝要である。

一九 油 斷

山本有子

伊藤一刀齋景久といへば、一刀流の開祖であるから、斯道の人でなくとも、大方は知つてゐると思ふ。全國を武者修業して歩いて、名ある人と技を闘はすこと前後三十三回、唯の一度も敗を取つた事がないといふ劍道の達人である。

神子上典膳
號は獨身齋
(寛永五年歿)

或時遍歴の途すがら、一刀齋は上總の國にやつて來た。するとそこに劍槍にたくみな神子上典膳といふ士がゐた。一刀齋が來たといふので、早速試合を申込んで來た。併し、立ちあつて見ると、典膳はもとよりその相手ではなかつた。そこで、すぐに一刀齋の弟子となつた。これが後に一刀流を大成して世に弘めた、小野二郎右衛門忠明の前身である。

忠明がまだ典膳といつて、一刀齋に従つて全國を武者修業して歩いた時分の話である。一日、典膳は師匠に劍道の極意を訊ねた。すると一刀齋は、別に極意といふ程のものはない。たゞ油断をしないのが第一だといつた。そして、稽古をしてくれるといふことは殆どなかつたが、坐つて居る時でも、歩いてをる時でも、典膳にすこしの油断でもあると、容赦なく「ほかり」と撲りつけた。或時、典膳が飯を食つてゐると、いつものやうに「ほかり」と來た。

極意
至極
秋義

しかし、典膳はもう大分修練が積んでゐるから、來たなと思ふや否や、びたつと箸で受止めてしまつた。

「大分修業が出來てきたな。そのくらゐ油断しないやうになれば、まあ大丈夫ぢや。」一刀齋は微笑しながら褒めた。

この時ばかりは、典膳も實に嬉しかつた。いつも撲られ通して、痛い目ばかり見せられてゐたのに、始めて師匠から褒められたのだから、彼は本當にほつとした。

「お蔭をもちまして……」彼は恭しく師匠の前に頭を下げた。すると、忽ち「ほかり」とやつつけられた。

「また油断をはじめたか。」

「心を何處に置かうぞ。敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるゝなり。敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取

らるゝなり。敵を切らんと思ふ所に心を置けば、敵を切らんと
思ふ所に心を取らるゝなり。我太刀に心を置けば、我太刀に心
を取らるるなり。われ切られじと思ふ所に心を置けば、切られ
じと思ふ所に心を取らるゝなり。(中略)

何處にも置かねば、我が身に一ばいにゆき渡りて、全體に延び
廣がりてある程に、手のいる時は手の用を叶へ、足のいる時は足
の用を叶へ、目のいる時は目の用を叶へ、そのいる所々に行きわ
たりてある程に、そのいる所々に叶ふなり。萬一、もし一所に定
めて心を置くならば、一所に取られて用は缺くなり。

思案すれば思案に取らるゝ程に、思案をも分別をも残さず、心
をば總身に捨ておき、所々に止めずして、その所々にあつて用を
外さず叶ふべし。心を一所に置けば、偏に落つるといふなり。
偏とは一方に片付きたることをいふなり。(中略)

澤庵
秋庭氏
名は宗彭
東海寺開山
(正保二年歿)
柳生宗矩
兵法家
徳川家光の師
範役
(正保三年歿)

澤庵筆蹟

たゞ一所に止めぬ工夫、これみな修業なり。心をば、何處にも
止めぬが眼なり、肝要なり。どつこにも置かねば、どつこにもあ
るぞ、心を外へやりたる時も、心を一方に置けば、九方は缺くる
なり。心を一方に置かざれば、十方にあるぞ。
これは澤庵禪師が禪劍一如の妙趣を、柳生但馬守宗矩に垂示
した「不動智神妙録」の中の一節である。



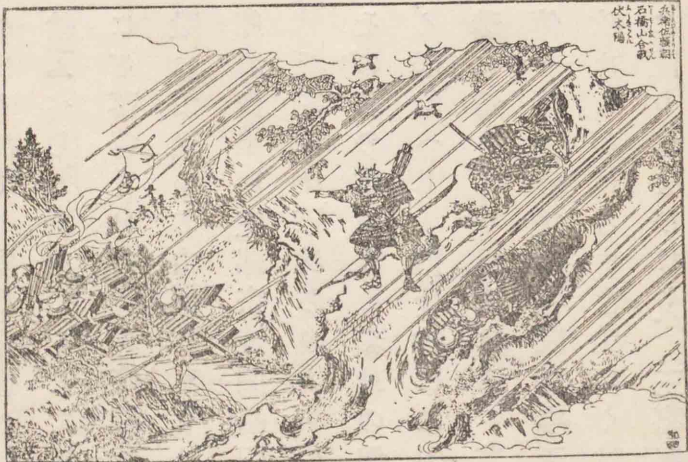
油斷といふ
のは、心のうつ
ろになること
ではない。心

が一方にとられることをいふのだ。とかく人は、刀を手にすると
刀に心を奪はれる。學問をすると學問に心を奪はれる。褒めら
れると褒められたことといふ、氣になる。それが油斷である。(途上

兵衛佐
源頼朝
大場
三郎景親
曾我
太郎祐信

二〇 伏木がくれ
兵衛佐殿は、土肥の杉山をまもつて搔分け、落給ふ。伴には土肥次郎實平、北條四郎時政、岡崎四郎義實、土肥彌太郎遠平、懷島平權守、景能藤九郎盛長以下の輩相隨つて落給ひけるを、大場曾我家内者して、三千餘騎にて追駈けたり。杉山は分内狭き所にて、忍び隠るべきやうなし。田代冠者信綱は大將を延ばさんとて、高木の上に登つて、引取りくさんく射る。敵三千餘騎、田代に防がれて、さうなく山にも入らざりけり。その隙に、佐殿は鴟の岩屋といふ谷におり下り見廻せば、七八人が程入りぬべき大なる伏木あり。暫くこゝに休みて、息をぞつぎ給ひける。さる程に、御方の者共多く跡目について來りあつまる。爰に佐殿仰せけるは、敵は大勢なり。而も大場曾我家内者にて山蹈して

伏木がくれ
(源平盛衰記
圖會)



此處を遁れ出て、大事をなし立てたらんこそ兵法には叶ふべけれ。

相尋ぬべし。されば大勢悪しかりな
ん。ちりくゝに忍び給へ。世にあら
ば互に尋ね尋ぬべしと宣へば、つはも
の、我等既に日本國を敵にうけたり。
遁るべき身にあらず。とにもかくに
も一緒にこそと各返事申しければ、兵
衛佐重ねて宣ひけるは、軍の習或は敵
をおとし、或は敵におとさるゝ、これ定
まれることなり。一度軍を敵に敗ら
れ、ながく命を失ふ道やはあるべき。
こゝにあつまり居て、敵にあなづられ
て命を失はん事、愚かなるにあらずや。

いかにも多勢にては遁れ得べからず、各心に任せて落つべし。頼朝山を出でて安房上總へ越えぬときこえば、その時急ぎ尋ね來り給ふべし」と言をつくして宣へば、道理のがれ難うして、各思ひにぞ落行きける。北條四郎は甲斐の國へぞ越えにける。兵衛佐殿に相從ひて山にこもりける者は、土肥次郎實平、同男遠平、新開次郎忠氏、土屋三郎宗遠、岡崎四郎義實、藤九郎盛長なり。

兵衛佐は軍兵ちりぐになりて、伏木の中に隠れ入りにけり。その日の装束には、赤地の錦の直垂に赤絲緘の鎧着て、伏木の端近く居給へり。裾金物には銀の蝶の丸をきびしく打つたりければ、殊に輝きてぞ見えける。其の中に藤九郎盛長申しけるは、盛長承傳へ侍り、昔後朱雀院御宇、天喜年中に御先祖伊豫守殿、貞任、宗任を攻められけるに、官兵多く討たれて落給ひけるに、僅に七騎にて山に籠りたまひけり。王事靡監終に逆賊を亡ぼして四海を靡かし

伊豫守
源賴義

給ひけり」と。今日の御有様、昔に相違なし、吉例なり」と申しければ、兵衛佐たのもしく思召して、八幡大菩薩をぞ心の内には念じ給ひける。田代冠者は矢種既に盡きぬ。佐殿今は遙に落延びたまひぬらんと思ひければ、木より飛びおりて、跡目につきて落給ひ、同じく伏木の中にぞ入りにける。

田代、佐殿に面を合はせて、「いかゞすべき」と歎く處に、大場曾我、俣野梶原三千騎、山踏して、木のもと萱の中に亂れ散りて尋ねけれど、も見えざりけり。大場、伏木の上に登りて、弓杖を突き踏みまたがりて、「まさしく佐殿はこゝまでおはしつるものを、伏木不審なり。うつぼに入りて捜せ者共と下知しけるに、大場がいとこに平三景時進出で、弓脇にはさみ、太刀に手かけて、伏木の中につと入り、佐殿と景時と眞向に居向ひて、互に眼を見合ひたり。佐殿は今のかざり、景時が手にかゝりぬとおぼしければ、急ぎ案じて、降をや乞ふ、自

害をやすると思しけるが、いかゞ景時ほどの者に降をば乞ふべき、
 自害と思ひ定めて、腰の刀に手をかけ給ふ。景時あはれに見奉り
 て、暫く相待給へ、助け奉るべし。軍に勝ちたまひたらば公忘れ給
 ふな。もし又敵の手にかゝり給ひたらば、草の蔭までも景時が弓
 矢のうへを守り給へと申しも果てぬに、蜘蛛の絲さと中にひきた
 りけり。景時不思議と思ひければ、彼の蜘蛛の絲を弓の筈兜の鉢
 に引懸けて、暇申して伏木の口へ出でにけり。佐殿しかるべき事
 と、思しなから、掌をあはせ、景時が後貌を三度拜して、我世にあらば
 其の恩を忘れじ。縦令亡びたりとも、七代までは守らんとぞ心中
 に誓はれける。後に思へば、景時が爲には、忝しとぞおぼえける。
 平三、伏木の口に立塞がりて、弓杖を突き申しけるは、この内には
 蟻、螻蛄もなし、蝙蝠は多く騒飛び侍り。土肥の眞鶴を見やれば、武
 者七八騎見えたり。一定佐殿にこそと覺ゆ。あれを追へとぞ下

ゲンヤン
 見えム然リ

知しける。大場見やりて、彼も佐殿にてはおはせず。いかにも伏
 木の底不審なり。斧鉞を取寄せて、切割りて見るべしといひける
 が、それも時刻を移すべし。よし、景親入りて、搜して見んとて、
 伏木より飛下りて、弓脇ばさみ太刀に手をかけて、中に入らんとし
 けるを、平三立塞がり、太刀に手かけていひけるは、や、大場殿、當時
 平家の御代なり。源氏軍に負けて落ちぬ。誰人か源氏の大将軍
 の首取つて、平家の見参に入れて、世にあらんと思はぬ者あるべき
 か。御邊に劣つて、この伏木を搜すべきか。景時に不審をなして
 搜さんと宣はば、我々二心ある者とや。かねて人の隠れたらんに、
 かく兜の鉢弓の筈に蜘蛛の絲かゝるべしや。これをなほも不審
 せられんには、生きても面目なし。誰人にも搜さすまじ。この上
 に推して、搜す人あらば、思ひきりなん、景時はといひければ、大場も
 さすが入らざりけるが、なほも心にかゝりて、弓をさし入れて、打振

りつゝ、からりくと二三度搜り廻しければ、佐殿の鎧の袖にぞあ
たりける。深く八幡大菩薩を祈念し給ひける驗にや、伏木の中よ
り山鳩二羽飛出でて、はたくと羽打して出でたりけるにこそ、佐
殿内におはせんには、鳩あるまじとは思ひけれども、いかにも不審
なりければ、斧鉞を取寄せて切つて見んといひけるに、さしも晴れ
たる大空俄に黒雲引覆ひ、雷おびたゞしく鳴廻つて、大雨頻りに降
りければ、雨やみてのち割りて見るべしとて、杉山を引返しけるが、
大きな石のありけるを、七八人して倒し寄せ、伏木の口に立て塞
ぎてぞ歸りける。これも然るべき兵衛佐の世に立つべき瑞相に
て、かゝる伏木のうつぼにも隠れけるにやと、末たのもし。

佐殿は、三千餘騎が引退きたるその隙に、内より石をころばしの
け、伏木を出でて小道越といふ岩石を上り、土肥の眞鶴へむかつて
落行きけり。(源平盛衰記)

舟

懐

實平

二一 七騎落

身は捨小舟、うらみてもかひなきや憂世なるらん。頼朝「これは
兵衛佐頼朝とは我が事なり。さても昨日石橋山の合戦に身方う
ち負け、あまりに無勢に候程に、一先づ安房上總の方へ開かばやと
存候。如何に土肥の次郎。」實平「御前に候。頼朝「あまりに身方無
勢にある間、一先づ安房上總の方へ開かうずるにてあるぞ。急い
で舟の事を申し付け候へ。」實平「畏まつて候。とくより御舟の事
を申し付けて候。急いで召されうずるにて候。頼朝「いかに實平、
實平「御前に候。頼朝「唯今船中に供したる人数は如何程あるぞ。
實平「さん候。ただ七騎御座候。頼朝「さては頼朝までは八騎よな
きつと思ひ出したる事あり。祖父爲義江州を開きし時も主従八
騎、父義朝尾張國へ落ち給ひしも主従八騎、思へば不吉の例なり。」

實平はからひて舟より一人おろし候へ。實平「畏まつて候。」
 實平おほせ承り、舟のせがいに立上り、御供の人数を見渡せば、先
 づ一番には田代殿扱二番には新開の次郎、又三番には土屋の三郎、
 四番は土佐坊、五番には實平候。六番には同じき遠平、舳板には義
 實あり。此の人々は君の爲龍門原上の土に屍をば曝すとも、惜し
 かるまじき命かな。何れを擇出ださんと、さしもの實平思ひかね、
 赤面したるばかりなり。頼朝「如何に實平、何とて遅きぞ、急いでお
 ろし候へ。」實平「畏まつて候。如何に、岡崎殿に申候。急いで御舟
 より御下り候へ。」義實「何と、某に御舟より下りよと候ふや。」實平
 「なか／＼の事。」義實「暫く。この御供のうち、某一の老體にて候
 程に、かひがひしく御用に立つまじき者と御覽じ限られて、斯様に
 承候ふな。其の儀においては御舟よりは下り候ふまじ。」實平「い
 やいや、左様の儀にては無く候。舳板に召されし程に、陸の近さに

申し候。」義實「いや、所詮この船中に、命二つ持ちたらんずる者を、御
 舟より下され候へ。」實平「これは不思議なる事を承り候ふものか
 な。それ、人は生ずるより死する迄、命をば一つこそ持ちて候へ。
 二つ持ちたるいはれの候ふか。」義實「さん候。某も昨日迄は命二
 つ持ちて候ふを、早一つの命をば我が君に參らせ上げて候。實平、
 扱其のいはれは候。義實「その事にて候。昨日石橋山の合戦に、子
 にて候ふ眞田の與一、義忠は、副將軍を賜はり、俣野と組んで討たれ
 ぬ。されば親子は一體、二つの命ならずや。見申せば土肥殿こそ、
 この御舟に親子一緒に渡られ候へ。御分残つて遠平をおろすか、
 遠平を残して御分おるゝか、親子の内一人おりられ候へ。」實平「尤
 もにて候。あまりの道理に物なのためひそ。如何に遠平、君より
 の御錠にてあるぞ。急いで御舟より下り候へ。」遠平「何と、御舟よ
 り下りよと仰候ふか。」實平「中々の事、急いで下り候へ。」遠平「遠平

諸曲原本

七騎落
 宣化天皇の頃
 佐用姫
 宣化天皇の頃
 の人

幼く候へども、君の御大事に立たん事、誰にか劣り候ふべき。御舟よりは下りまじく候。實平「小賢しき事を申す者かな。君の御爲、父が命にては無きか。急いで御舟より下り候へ。」遠平「いや、君の御爲、父の命をば背くとも、御舟よりは下りまじく候。實平「言語道斷の事を申すものかな。君の御爲、父が命をば背くとも下りまじきと申すか。其の儀ならば、人手には掛けまじいぞ。」義實暫く。これは君の御門出なるに、誤りたるか實平。實平「何處までも某が誤りて候。所詮おりまじきと申す者をおろさんより、某御舟より下りようずるに候。遠平「如何に申し候。さらば某御舟より下り候ふべし。」實平「何と、下りようずると申すか。」

尋常
 二りつは

佐用姫
 宣化天皇の頃
 の人

實に、今こそ某が子にて候へ。あれを見よ、敵大勢うち出でたり。かまへて某が子と名のつて、尋常に討死せよ。名残こそ惜しけれ。かくて我が子をおろし置き、實平御舟に参りけり。ゆゑ、しく見ゆる實平かなと、互の心を思ひやり、親子のわかれ痛はしや。遠平「父のわかれは申すに及ばず、君を始め参らせて、皆人々に御名残こそ惜しう候へ。」彼の松浦佐用姫がもろこし舟を慕ひわびて、渚にひれ伏しし有様も、今遠平が親と子の別にかはらじと、皆涙をぞ流しける。

契程なき早舟を、暫しとだにもいひあへず、跡を見送り佇めば、はや遠ざかる浦の波、立別れ行く有様を、餘の人々は心して、あはれみあへる舟の内に、實平はひたすらに弱氣を見えじとて、中々かへり見おきもせで、心強くも行く跡に、敵大勢見えたり。すはや、遠平は討たるゝとて、頼朝もあはれみ陸を見給へば、さすが實に恩愛の契

宣化天皇の頃

も、ただ今をかぎりぞと思ひ、實平は磯邊にむかひ、人知れず、心のま
まならば、あはれ遠平と一緒に討死せばやと、あこがれて、飛立つば
かりに思ひ子の、別ぞあはれなりける。

義盛
和田氏
小太郎といふ
三浦義明の孫

弓張月の西の空、行くへ定めぬ舟路かな。沖なる波のおとまで
も、瀾の聲かと恐しや。義盛「あれに見えたるが御座舟にてありげ
に候。急いで舟を漕ぎ候へ。」船頭「畏まつて候。」實平「如何に申し
候。あれに兵船一艘見えて候。先づこなたより詞を掛けうずる
にて候。」義實「然るべう候。」實平「如何に、あれなる舟は、誰が召され
たる御舟にて候ふぞ。」義盛「我もそなたの舟影を、あやしく思ひや
すらふなり。そも誰人の舟やらん。」實平「是は土肥の次郎實平が
乗りたる舟候ふよ。」義盛「何と、土肥殿の御舟と候ふや。」實平「中々
の事。扱も其の御舟は、誰が召されたる御舟にて候ふぞ。」義盛「是
こそ和田の小太郎義盛が乗りたる舟候ふよ。」實平「扱は和田殿の

御舟にて候ふか。」義盛「中々の事。内々申し通ぜし如く、御身方に
参らん爲に、是まで参りて候。さて君は其の御舟に御座候ふか。」
實平「和田は内々申し合はせたる事の候間、唯今参りて候。さりな
がら、先づたばかつて心を見うずるにて候。如何に、和田殿へ申し
候。是までの御まゐりめでたう候。さりながら、面目もなき事の
候。昨日の暮程より我が君を見失ひ申し、かやうに浮かれ舟とな
つて尋ね申し候ふよ。」義盛「何と、君は其の御舟に御座なきと候ふ
や。」實平「さん候。義盛「言語道断の事にて候ふものかな。我身方
をば忍び出で、月日とも頼み奉る頼朝にも離れ申し、此の上は命あ
りても何かせん。いで、自害に及ばんと、腰の刀に手を掛くる。
實平「あゝ、暫く。君はこの舟に御座候。」義盛「何と。君は其の御舟
に御座候ふとや。」實平「中々の事。」義盛「扱何とてかやうには承り
候ふぞ。」實平「是は戲事にて候。幸に陸近う候程に、其の舟をも寄

せられ候へ。御舟をも寄せ候ひて、陸にて御對面あらうずるにて候。義盛「心得申し候。さらばやがて陸へ参らうずるにて候。」

實平「如何に申し候。御前にて候。義盛「わが君を見奉りて、今は安堵仕りて候。實平「實にく、尤もにて候。義盛「如何に、土肥殿に申し候。實平「何事にて候ふぞ。義盛「この御供の内に、何とて御息遠平は御座候はぬぞ。實平「其の事にて候。さるいはれあつて陸に残し置きて候。義盛「とくより斯くと申したくは候ひつれども、以前某に心を盡くさせられ候ふ其の返報に、今迄はかくとも申さぬなり。いで、土肥殿に引出物申さんと、隠し置きたる舟底より、遠平を引立て見せければ、其の時實平あきれつゝ、夢か、現か、こは如何にと覺えず抱きつき、泣き居たり。譬へば仙家に入りし身の、半日の程に立歸り、七世の孫に逢ふ事の譬も今に知られたり。實平「如何に義盛に申し候。扱この者をば何として召連れられ

現
現
ちほ
う

て候ふぞ。義盛「さん候。是まで伴なひ申したるいはれを、御前に

て申し上げうずるにて候。實平「急いで御物語り候へ。義盛「扱も昨日石橋山の合戦破れしかば、大場が手勢君を討ち奉らんと、大勢渚に打出でたりしに、某も一緒にうつて出でしが、汀を見れば、引きかねたる若武者一騎控へたり。某、駒かけよせて見れば、御息遠平なり。急ぎ馬より飛んで下り、生捕る體にもてなし、舟底に乗せ申し、是まで伴なひ参りたり。なんぼう土肥殿に、義盛は忠の者にて候ふぞ。實平「かゝるあり難き事こそ候はね。唯今の御物語を聞き候ひて、落涙仕りて候ふを、さぞ人々の、不覺の涙とやおぼし召すらん。さりながら、嬉し泣の涙は、何か包まん唐衣、ひも夕暮になりぬれば、月の盃とりどりに、主従共によるこびの、心嬉しき酒宴かな。義盛「如何に實平、あまりにめでたき折なれば、一さし御舞ひ候へ。實平「さらば、そと舞はうずるにて候。心嬉しき酒宴かな。」

かくて時日をめぐらさず、國々の兵馳參ずれば、程なく御勢二十萬騎になり給ひつゝ、掌に治め給へるこの君の御代のめでたき始も、實平正しき忠勤の道に入る、弓矢の家こそ久しけれ。(觀世流謠曲)

二二 俚諺論

大 西 祝

ローマの一詩人がエピグラムを蜜蜂に譬へて、螫あり、蜜あり、軀は小さしと言へるは、すべての俚諺にとは言ひがたきも、其の最も巧妙なるものには、恰當せる語なるべし。俚諺の上乗なるものは、多くは此の三者を具ふ。言短くして意義味はふべく、寸鐵人を刺すの妙あり。

人口に膾炙し易からんことを求むる故に、俚諺は自ら律語をなす傾あり。我が國語にては、五または七がおのづからなる律呂なれば、我が國の俚諺には、此の律に従へるもの甚だ多し。「雉子も鳴



大西祝

哲學者
文學博士
京都帝國大學
教授
(明治三十三年
歿年三十六)

かずば打たれまい。「心の鬼が身を責める」といふ如く、最もよく人口に膾炙せるものにして、七五の調子をなせるはいと多し。「人と屏風はすぐには立たぬ」「思ふ念力岩をも徹す」「身を捨ててこそ浮かむ瀬もあれ」などは、七七の調子をなして、語呂頗るよし。「十で神童、十五で才子、二十過ぎてはたゞの人」といふも、其の語に律あり。右と同じ理由により、同語または同音を重ねたる類のものも多し。例へば、「多勢に無勢」「短氣は損氣」「弱り目に祟り目」「處變れば品變る」「藥九層倍」「勝つて兜の緒を締めよ」といふが如し。かく律をなし、尾韻または頭音を合はすること、詩の句法に似たる所あるのみならず、俚諺に抽象語少なく、多くは具體的に言做して、感動の強からんことを求め、またそれが爲に屢、誇張の言を喜ぶなども、其の詩歌に似たる點なり。此の故に、諺にて物の度量をいふには、其の數または量を定めていふを好む。「七たび捜して人を疑へ」「人の

人の噂七時間の内題、預り物は半分の主などの類は、數ふるに違あらず。數の中にも、最も好んで用ひらるゝは三の數なるべし。「三度目が定の目」「三年たてば三つになる」「懺悔話をすれば三年の罪が滅びる」「三人よれば文珠の智慧」「三人よれば人中」「朝起は三文の徳」其の他なほ多かるべし。また用心は臆病にせよ。「黒犬にくはれて灰の和滓に恐れる」などは、誇張して言ふによりて、其の意味を成せるものの例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見誠しやかならぬ語句、即ちパラドックスを用ふるを喜ぶ。此の種の諺に深く味はふべきもの少なからず。「急がば廻れ」「言はぬは言ふに勝る」「逢ふはわかれの始」「兄弟は他人のはじまり」「論語讀みの論語知らず」「人を使ふは使はれる」など、其の例なるべし。かく相反するが如き事柄の中に、却つて相通ずる所あるを發見するは、深邃なる智慧の

一 特徴なり。

パラドックスといふにはあらずとも、總じて反對のものを相並ぶるは、吾人の注意を捕ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。「骨折損の草臥儲」「聞いて極樂見て地獄」「問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥」「長者の萬燈より貧者の一燈」など其の例なり。反對を並ぶるのみならず、總じて二種の事柄を相並べてそれを比照するは、俚諺の一大特色なり。これ俚諺の比喻に富める所以にして、其の比喻の極めて妙なる、詩人の作としてはづかしからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは、多く此の類にあり。今思出づるに隨うて、其の三四の例を掲げん。「馬には乗りて見よ、人には添うて見よ」「旅は道づれ世はなさけ」といふが如きは、幾度唱するも其の趣味の津々たるを覺ゆ。「花は櫻木人は武士」これ我が國民の以て、それが理想を誇るに足るものの一なるべし。「佛法と藁屋

の雨は出でて聞け。風流の心に富める國民ならで、誰かこれをえ言出でん。試に口ずさみ見よ、いかにも詩心道心宗教心の相結びてなせる高雅幽玄なる妙趣のうかびきたるにあらずや。

かく、二つの事を並べ出でて相比照することなく、唯普通の暗喩を用ひたるものも頗る多し。例へば「商賣は牛の涎」「祕事は睫」といふが如し。而して、更に其の喩のみを掲げて、他の意味を匂はせたるものも、其の數多かるべし。「蟹は甲に似せて穴を掘る」「目糞、鼻糞を嗤ふ」といふが如きは、此の例なり。

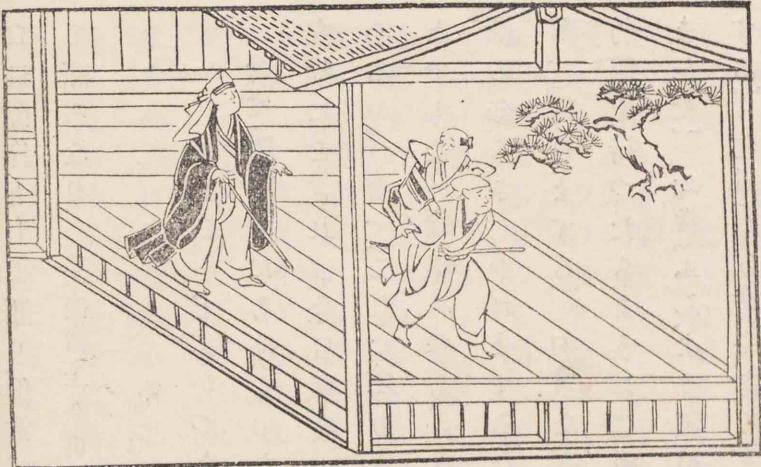
かく比喩の用ひ方には數種あれど、そのこれを用ふるは、寓言に於ける用ひ方とは同じからず。「目糞、鼻糞を嗤ふ」といふが如きは、多少寓言に近寄れる所あるが如く思はるれど、俚諺と寓言とは、後者は敘事(物語)の體裁を具へ、前者は然らざる點において、全く相異なり。同じく意を寓して比喩を用ふるも、寓言はこれを出來事ま

たは動作として語り、俚言は時間に結ばずして、唯、常恒の事實として語るなり。(大西博士全集)

二三 どぶかつちり

勾當「罷出でたるは、このあたりに住居仕る勾當の坊でござる。左様にござれば、今日は菊一を連れ、嵯峨へ参らうと存ずる。菊一あるか。」菊一「これに居りまする。」勾當「そなたを喚出すは別のことでもない、嵯峨へ参らうとことぢやが、参りやらぬか。」菊一「勾當様の参らさしやれまするなら参りませう。」勾當「おじやれ〜。」菊一「行きまする。」勾當「なう菊一。」菊一「何でござりまする。」勾當「竹筒を持つたら、ようおじやらうものを。」菊一「これに心得て持ちました。」勾當「ふん、よう氣がついた。おじやれ〜。」菊一「参りまする。」勾當「なう菊一、あのどんどといふは川ではないか。」菊一「あ

狂言記挿繪



あ、これは川でござりまする。勾當「いかう水が出たさうなぞや。菊一「待たしやれませい、瀬踏をして見ませう。石はないかぢやまでい。いえあるは、ま、此處へ打つて見ませう。どぶく、あ、いかう深さうな。上手へ打つて見ませう。やえい。どぶり、かつちり。はあ勾當様、上へ廻らしやれませい。上が浅うござりますぞ。勾當「やい菊一、負うて渡せ。菊一「こな様も渡らしやれませい、さて。道行人「罷出でたるは道とほりでござる。いや座頭が座頭を負うて渡すと見えた。それがし

が負はれて渡りませうぞ。勾當「やい菊一、おのれを連れるは、このやうな川なども、負はれて渡らうと思つて連れられ。急いで負へいの。菊一「こゝへござりませい。あ、いかう深うござりまするぞ。やうくのこととして渡つたよ。道行人「やれさて、まんく、と負はれて渡りました。勾當「やい菊一、おのればかり渡つて、なぜにそれがしをば置いて行たぞいやい。菊一「わ、勾當様、又今の程負越したに、足のまめな、なぜに又そちらへ行かしかつたぞ。はれさて物好きな。目の見えぬ者をば、彼方へ此方へさするが面白いかぢやまでい。さ負はれさつしやれい、いえさて又負はれさつしやれ、面白うござるの。勾當「何をいふぞいやい。菊一「何いふとことがあるものでござるかいの。は、深い所へはひりましたはいの。勾當「これおのれ何事しをつたぞ。菊一「轉びましたはいの。勾當「やれさてくつと濡らしをつた。菊一「はじめのおかさしやりやよい事、

二度三度さつしやる處で、え、濡れてさぶやな。勾當「やい菊一、今の竹筒は流れはせなんだか。」菊一「腰にいはへつけて置きました。」勾當「どりや一つ飲まうに。」菊一「わしもたんませう。参りませい。道行人「いや、座頭が酒を飲むていでござる。負はれたうへに、また酒も飲みませう。」菊一「勾當様、まゐりませい。わしも一つたべませうよ。」勾當「やい、そこな奴、おれにもくれいで、何故に飲むぞい。」菊一「いまのほど、こしめしてから、飲みがくしばかりさつしやる。」勾當「飲まうことはい。」菊一「いや、これまゐりませいの。ござりまするか。又わたくしもたべませうよ。」勾當「やい菊一、わればかり飲むか。なぜにおれにはくれぬぞい。」菊一「これも、ござらぬは。樽かぶらしやれい。」道行人「さてもく、座頭といふものは面白いものでござる。ちと諍はしませう。」勾當「やい、こゝな菊一めは、酒くれぬのみならず、おのれはなぜにくはせたぞ。」菊一「勾當様、飲み

三
三
三

五
イ

左丘明
「左傳の著者」

がくしさつしやるさへぢやに、何とさつしやる。勾當「いや、おのれ憎い奴の。」菊一「こりやなんとめさるぞい。」道行人「さてもさてもよい慰でござる。どづいて諍はする、こんな面白いことはござらぬ。」菊一「なう勾當様、今のを聞かしやつたか。」勾當「さればいやい、今思ひつけた。」菊一「酒飲うだり、くはしたり、負はれたもあいつでござりませう。」勾當「菊一、とらまへ。」菊一「勾當様、ござりませい。おのれどこに居るぞ。」勾當「やるまいぞく。」道行人「わ。」(狂言記)

二四 麒麟麟
鳳兮鳳兮
往者不可諫
已而已而
何德之衰
來者猶可追
今之從政者殆而

谷崎潤一郎

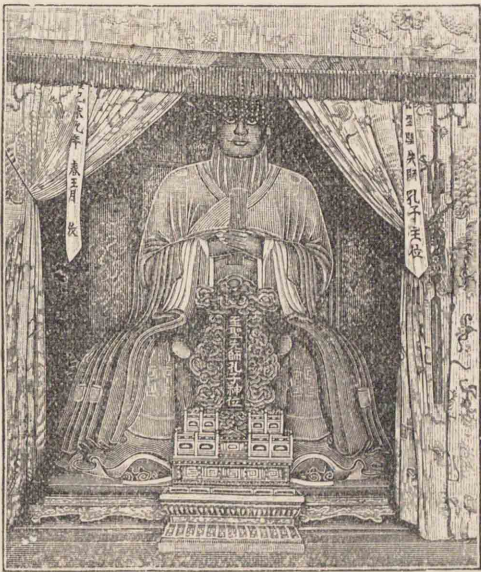
西曆紀元前四百九十三年、左丘明・孟軻・司馬遷等の記録によれば、

孟軻
「孟子」の著者
司馬遷
「史記」の著者

孔子像

子路
孔子の門人

顔淵
孔子の門人
曾參
孔子の門人
樊遲
孔子の門人



魯の定公が十三年目の郊の祭を行はれた春の始、孔子は數人の弟子たちを車の左右に従へて、その故郷なる魯の國から傳道の途に上つた。

泗水の河の畔には芳草が青
青と芽ぐみ、防山、尼丘、五峰の頂
の雪は融けても、沙漠の砂を擱
んで來る匈奴のやうな北風は、
いまだに烈しい冬の名残を吹
送つた。元氣のよい子路は紫
の貂の裘を翻して、一行の先頭
の履を穿いてその後に續いた。正直者の御者の樊遲は、駟馬の銜
を執りながら、時々車上の夫子が老顔を窺み視て、傷ましい放浪の

師の身の上に涙を流した。或日、愈、一行が魯の國境までやつて來ると、誰も彼も名残惜しさうに故郷の方を振り返つたが、通つて來た路は、龜山の蔭に隠れて見えなかつた。すると孔子は琴を執つて、

われ魯を望まんと欲すれば

龜山これを蔽ひたり。

手に斧柯なし。

龜山をいかにせばや。

かういつて、さびた皺唄れた聲で歌つた。これからまた北へ北へ三日ばかり旅を續けると、廣々とした野に、安らかな屈託のない歌がきこえた。それは、鹿の裘に索の帶をしめた老人が、畦路に落穂を拾ひながら歌つてゐるのであつた。

「由や、お前にはあの歌がどうきこえる」と、孔子は子路を顧みてたづねた。

われ魯を云々
予欲望魯兮
龜山蔽之
手無斧柯
奈龜山何
(文體明辨)

老子
道教の祖

「あの老人の歌からは、先生の歌のやうなあはれな響がきこえま
せん。 大空を飛ぶ小鳥のやうな恣しんまな聲で歌つて居ります。」
「さもあらう。 彼こそ古の老子の門弟ぢや。 林類といつて、もは
や百歳になるであらうが、あのとほり春が來れば畦に出て、何年
となく歌を歌うては穂を拾うてゐる。 誰か、彼處へ行つて話を
して見るがよい。」

かういはれたので、弟子の一人の子貢は、畑の畔へ走つて行つて老
人を迎へ、たづねていふには、

「先生は、さうして歌を歌うては落穂を拾うていらつしやるが、何
も悔いるところはありませぬか。」

しかし老人は振向もせず、餘念もなく落穂をひろひながら、一步一
歩に歌を歌つて止まなかつた。 子貢がなほもその跡を追うて聲
をかけると、老人はやうやく歌ふことをやめて、子貢をつくづく眺

子貢
孔子の門人

めた後、

「わしに何の悔があらう」といつた。

「先生は幼い時に行を勤めず、長じて時を競はず、老いて妻子なく、
漸く死期が近づいてゐるのに、何をたのしみに穂を拾つては歌
を歌うておいでなさる。」

すると、老人はから／＼と笑つて、

「わしのたのしみとするものは、世間の人が皆持つてゐて、却つて
憂としてゐる。 幼い時に行を勤めず、長じて時を競はず、老いて
妻子もなく、漸く死期が近づいてゐる。 それだからこのやうに
たのしんでゐる。」

「人は皆長壽を望み、死を悲しんでゐるのに、先生はどうして死を
樂しむことが出來ますか」と、子貢は重ねてきいた。

「死と生とは、一度往つて一度返るのぢや。 こゝで死ぬのは、かし

こで生まれるのぢや。わしは、生を求めて齷齪するのは惑ぢやといふことを知つてゐる。今死ぬるも、昔生まれたのとかはりはないと思つてゐる。」

老人はかう答へて、また歌を歌ひ出した。子貢には言葉の意味が解らなかつたが、戻つて来てそれを師に告げると、

「なか／＼話せる老人であるが、しかしそれはまだ道を得て至りつくさぬものと見える」と、孔子がいつた。

それから又幾日も／＼長い旅を續けて、箕水の流を涉つた。夫子が戴く縑布の冠は埃にまみれ、狐の裘は雨風に色が褪せた。

「魯の國から孔丘といふ聖人が來た。その人は、暴虐な私たちの君や妃に、幸な教と賢い政とを授けてくれるであらう。」

衛の國の都にはひると、巷の人々がかういつて、一行の車を指さした。その人々の顔は饑と疲とに瘦衰へ、家々の壁はなげきと愁と

の色を湛へてゐた。その國の麗しい花は、宮殿の妃の眼を喜ばす爲に移し植ゑられ、肥えた豕は妃の舌を培ふ爲に召上げられ、長閑な春の日は、灰色にさびれた町をいたづらに照らした。さうして、都の中央の丘の上には、五彩の虹を繡出した宮殿が、血に飽いた猛獸の如くに、死骸のやうな街を瞰下してゐた。その宮殿の奥で打鳴らす鐘の響は、猛獸の嘯くやうに國の四方へ轟いた。

「由やお前にはあの鐘がどうきこえると、孔子は又子路に尋ねた。「あの鐘の音は、天に訴へるやうな、はかない先生の調とも違ひ、天に打任せたやうな、自由な林類の歌とも違つて、天に背いた歡樂を讃へる、恐しい意味を歌うて居ります。」

「さもあらう。あれは昔、衛の襄公が國中の財と汗とを絞り取つて造られた林鐘といふものぢや。その鐘が鳴る時は、御苑の林から林へ反響して、あのやうな物凄しい音を出す。又暴政に苛ま

れた人々の呪と涙とが封じられてゐて、あのやうな恐しい音を出すと、孔子は教へた。

衛の君の靈公は、國原を見晴らす靈臺の欄に近く、雲母の硬屏瑤の榻を運ばせて、青雲の衣を纏ひ、白霓の裳裾を垂れた夫人の南子と、香の高い酒を酌交しながら、深い霞の底に眠る野山の春を眺めて居た。

「天にも地にも、うらゝかな光が泉のやうに流れてゐるのに、何故私の國の民家では美しい花の色も見えず、快い鳥の聲もきこえないのであらう。」

かういつて、公は不審の眉を顰めた。

「それはこの國の人民が、わが公の仁徳と、わが夫人の美容とを讃へるのあまり、美しい花とあれば、悉く献上して、宮殿の園生の壇に移し植ゑ、國中の小鳥までが、一羽も残らず、花の香を慕うて園

生のめぐりにあつまるからでございます。」

と、君側に控へた宦官の雍渠が答へた。するとその時、さびれた街の静けさを破つて、靈臺の下を過ぎる孔子の車の玉鑿が、珊々と鳴つた。

「あの車に乗つて通る者は誰であらう。あの男の額は堯に似てゐる。あの男の目は舜に似てゐる。あの男の項は臯陶に似てゐる。肩は子産に類し、腰から下が禹に及ばぬこと三寸ばかりである。」

と、これも側に伺候してゐた將軍の王孫賈が、驚の眼を見張つた。

「しかし、まああの男は、何といふ悲しい顔をしてゐるのだらう。將軍、卿は物識だから、あの男がどこから來たか、わたしに教へてくれたがよい。」

かういつて、南子夫人は將軍を顧みつゝ、走行く車の影を指さした。

臯陶
舜に仕へた賢人
子産
支那春秋時代の鄭の賢相

「私は若い時諸國を遍歴しましたが、周の史官に勤めてゐた老聃といふ男の他には、まだあれほど立派な相貌の男を見たことがありません。あれこそ、故國の政に志を得ないで傳道の途に上つた、魯の聖人の孔子でありませう。その男の生まれた時、魯の國には麒麟が現れ、天には樂の音がきこえて、神女が天降つたと申します。その男は、牛の如き唇と、虎の如き掌と、龜の如き背とを持ち、身の丈が九尺六寸あつて、文王の容體を備へてゐると申します。彼こそ、その男に相違ありませぬ。」

かう王孫賈が説明した。

「その孔子といふ聖人は、人にいかなる術を教へる者であるか」と、靈公は手に持つた盃を乾して、將軍に問うた。

「聖人といふものは、世の中のすべての知識の鍵を握つて居ります。しかしあの人は、専ら家を齊へ、國を富まし、天下を平かにす

る道を、諸國の君に授けると申します。」

將軍が再び説明した。

「私は、妻を探し求めてこの南子を得た。また四方の財寶を萃めてこの宮殿を造つた。この上は、天下に覇を唱へて、この夫人と宮殿とにふさはしい權威が持ちたい。どうかして、その聖人をこゝへ呼びいれて、天下を平かにする術を授かりたいものぢや」と、公は卓を隔て、對してゐる夫人の唇を覗つた。何となれば、平生公の心をいひ表すものは、彼自身の言葉でなくつて、南子夫人の唇から洩れる言葉であつたから。

「わらはは世の中の不思議といふものに遇つて見たい。あの悲しい顔をした男が眞の聖人なら、わらははに色々な不思議を見せてくれるであらう。」

かういつて、夫人は夢見るやうな瞳をあげて、遙に隔たり行く車の

屈産の馬
晉の屈といふ
地方に産する
馬

あとを眺めた。
孔子の一行が北宮の前にさしかゝつた時、賢い相を持つた一人の官人が、大勢の供を従へ、屈産の駟馬に鞭うち、車の右の席をあけて、恭しく一行を出迎へた。

「私は、靈公の命を受けて先生をお迎へに出た、仲叔圉と申すものでございます。先生がこの度傳道の途に上られた事は、四方の國々までもきこえて居ります。長い旅路に、先生の翡翠の蓋は風に綻び、車の軛からは濁つた音が響きます。願はくは、この新しい車に召替へられ、宮殿に駕を枉げて、民を安んじ國を治める先生の道を、我等の公に授け給へ。先生の疲勞を癒す爲には、西圃の南に、水晶のやうな温泉が沸々とたぎつて居ります。先生の咽喉を濕す爲には、御苑の園生に、芳しい柚橙橘が甘い汁を含んで實のつて居ります。先生の舌を慰める爲には、苑圍の檻の

三王
太昊伏羲氏
炎帝神農氏
黃帝軒轅氏

中に、肥太つた豕、熊、豹、牛、羊が、蓐のやうな腹を抱へて眠つて居ります。願はくは二月も、三月も、一年も、十年も、この國に車を駐めて、愚かな私たちの曇つた心を啓き、盲ひた眼を開いて下さい」と、仲叔圉は車をおりて、懇懇に挨拶をした。

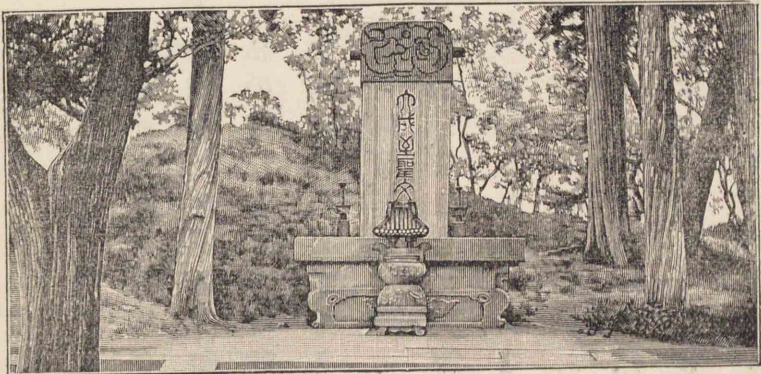
「私の望むところは、莊麗な宮殿を持つ王者の富よりは、三王の道を慕ふ君公の誠であります。萬乗の位も、桀紂の奢の爲にはなほ足らず、百里の國も、堯舜の政を布くには狭くはありませぬ。靈公が、まことに天下の禍を除き、庶民の幸を圖る御志ならば、この國の土に私の骨を埋めても悔いませぬ。」

やがて一行は導かれて、宮殿の奥深く進んだ。一行の黒塗の沓は、塵も止めぬ砥石の床に憂々と鳴つた。

「摻々たる女手以て裳を縫ふべし」と、聲をそろへて歌ひながら、大勢の女官が、梭の音たかく錦を織つてゐる織室の前も通つた。錦

摻々たる女手
摻々女手可
以縫裳。詩
經

孔子の墓



のやうに咲きこぼれた桃の林の陰からは、
苑圍の牛のモウケ懶げに唸る聲もきこえた。
靈公は賢人仲叔圍のはからひを聽いて、
夫人をはじめ一切の女を遠ざけ、歡樂の酒
の沁みた唇を濯ぎ、衣冠正しく孔子を一室
に請じて、國を富まし、兵を強くし、天下に王
となる道を質した。

しかし聖人は、人の國を傷つけ、人の命を
損ふ戦のことに就いては、一言も答へな
かつた。また民の血を絞り、民の財を奪ふ富
の事に就いても教へなかつた。さうして
軍事よりも、産業よりも、第一に道德の貴い
ことを嚴に語つた。力を以て諸國を屈服

する覇者の道と、仁を以て天下を懐ける王者の道との區別を知ら
せた。

「公よ、まことに王者の徳をお慕ひなさるなら、何よりもまづ私の
愆にうち克ち給へ。」

これが聖人の誠であつた。

その日から、靈公の心を左右するものは、夫人の言葉でなくして、
聖人の言葉であつた。朝には、廟堂に參して正しい政の道を孔子
に尋ね、夕には、靈臺に臨んで天文四時の運行を孔子に學んだ。錦
を織る織室の梭の音は、六藝を學ぶ官人の弓弦の音、蹄の響、筆ヒツ策の
聲に變つた。一日、公は朝早くひとり露臺に上つて國中を眺める
と、野山には美しい小鳥が囀り、民家には麗しい花が咲き、百姓は畑
に出て公の徳を讚へ歌ひながら、耕作にいそしんでゐた。

公の眼からは、熱い感激の涙が流れた。(麒麟)

禮記
御書

二五 偉人

嘉納治五郎

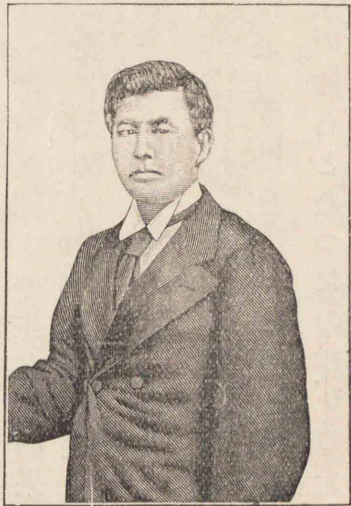
古來の生民蓋し幾萬億、その中より卓然として崛起し、功業德澤炳として、萬世の下に輝いて居る者は、實に彼等偉人である。若し偉人を人類の歴史から除き去つたとすれば、吾人の過去は如何に暗澹として、如何に寂寞なものであらうか。幸にして幾多の偉人傑士が星の如く歴史の空に列んで居て、今猶吾人の心中に不老の其の輝を投じ、破闇の其の光を耀して居るので、吾人人類はこゝに始めて意義ある過去を有し、光榮ある現在を有するのである。随つて吾人の文明は、彼等を離れて解釋することは出来ない。吾人の經營しつゝある事業は、彼等の遺業を繼紹して、これに新發展を加へんとするに外ならぬのである。古語に「大上は徳を立て、其の次は功を立て、其の次は言を立つ」と曰つてあるが、徳にもあれ、功に

大上は徳を立て
 其上有立德、
 其次有立功、
 其次有立言、
 雖久不廢此
 之謂不朽。
 (左傳)

もあれ、言にもあれ、彼等が人類に及ぼした影響は不朽不滅である。凡そ世の中に壯快といへば、偉人の事業ほど壯快なものはなく、崇高といへば、偉人の人格ほど崇高なものはないのである。

誠に思へ、我が國が明治の御代になつてから長足の進歩を爲し、世界の奇蹟とまで稱せらるゝに至つたのも、其の直接の原因は、王政の維新にあるのである。さうして、王政の維新は、幾多の偉人傑士の努力奮闘より生じた結果である。至誠皇室を尊び、衷心民人を愛し、大勢の趨く所に着眼して、經國の大本を定め、謀慮深遠、規畫周密、大いに皇猷を賛したのは、彼の木戸松菊であつた。高く自ら任じ、篤く自ら信じ、沈毅端嚴、善く斷じ、時局の紛難を處理すること、快刀の亂麻を斷つが如く、凜々たる英風よく上下の信賴を得て、國家の柱石となつたのは、かの大久保甲東であつた。光明磊落、規模宏遠、安危利害の上に超脱して、泰然として動かず、曠懷偉度、清濁併

木戸孝允



せ呑み、赤心（まじめな心）を人の腹中に置いて疑はず、談笑して天下の勢を制し、國家を磐石の安きに置いたのは、
彼の西郷南洲であつた。木戸の識、大久保の斷、西郷の量、三者相俟つてこゝに天地を旋轉するやうな大業が成就せられたのであつて、世に彼等を尊んで維新の三傑と稱するも、亦偶然ではないのである。當時彼等三傑が協心戮力

木戸孝允筆蹟

恭賦六字句を呈
踏得尖多臨海海春多記且波他年
香他身空此身此決夕何

して經國の大業を建てつゝ、あつた時に、他の一面に於ては、奇傑勝

大久保利通



海舟の如きがあつて、よく時難を濟つたのであつた。海舟人となり、鶴岡、草拔、其の炯々たる眼識は、よく時局を太觀し、機略縱横、死生の境を行くこと平地の如く、終に幕府をして恭順の實を挙げしめ、生民をして塗炭の苦を免れしめたのであつた。

大久保利通筆蹟

今南方已定、兵甲已足、
當此之時、誠難得也、
陛下之職、分也、

維新前後は、我が偉大なる國民精神の最も著しく發揮せられた時で、偉人傑士の風雲に乗じて起つたものは甚だ多かつたのであるが、就中海舟南洲の如きは、高山峻嶽の巍々として雲表に聳ゆるが如く、嶄然として頭角を現したものであつて、若し此等の人がなかつたならば、維新回天の事業も、かく速に圓滿なる成功を告ぐる事が出来なかつたであらうと疑はれるほどである。我が國民が、明治の初年において、早くも上下心を一にして盛に經綸を行ふといふ國是に従ひ、世界の競争場裏に進んで大いに國勢を張ることを得たのは、實に此等偉人の賜である。吾人國民が景慕の情を傾けて、これが傳を立て、これが像を掲げ、彼等の墓門既に苔むせる今日、彼等が猶吾人の中に活き、吾人を導いて居るやうに思はれるのは、實にその雄偉なる人格と、その赫々たる功業とを證するものである。

藤田東湖

名は彪

水戸の志士

(安政二年震死)

橋本景岳

名は綱紀

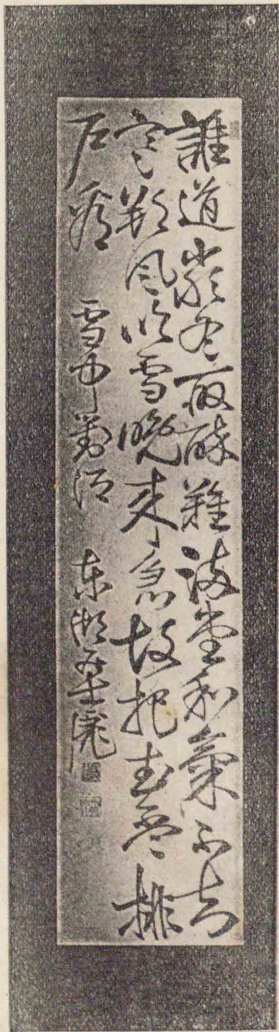
越前の志士

(安政六年刑死)

藤田東湖筆蹟



なほ吾人が想を馳せて、維新前國難に殉じた多數の志士を追懐すると、其の奉公の赤誠敢爲の志氣、轉ずる吾人をして感慨に堪へざらしむるが中にも、吉田松陰、橋本景岳の如きは、最も強く吾人の注意を惹くのである。西郷南洲は常に、余は先輩においては、藤田東湖に服し、同輩においては、橋本景岳を推す。



二子の才學器識は、とても吾輩の及ぶ所ではないといつた。時に

南洲は三十歳、景岳は二十三歳頃であつた事を思ふと、景岳は我が國の青年偉人中でも、最も卓越せる者といはねばならぬ。彼睿智の靈覺涌くが如く、早くも國家の大計に着眼し、一青年の身を以て、政界の大波瀾の中に手腕を試みたのであつた。不幸にして二十六歳を一期として、刑場の露と消えたけれども、彼の志は南洲等の知己に依つて成就せられた。吉田松陰も三十歳の短生涯を以て非命の死を遂げたけれども、彼の人格は永久に國士の典型として、青史を照らして居る。忠愛の至誠英發の志



氣、大義の存する所は水火をも避けず、身を殺して仁を成すといふ志士の本領は、彼において最もよく見る事が出来る。彼が一小私塾の教育につくした熱誠は、幾多の志士を輩出せしめて、王政維新の急先鋒となり、明治の御代になつてからも五人の大臣を出した位であつた。吾人は松陰、景岳に依つて英偉なる人物が其の少壯期において、既にかくも貴き事業を爲し得たことを詳かに、感謝の情に堪へないのである。

橋本景岳

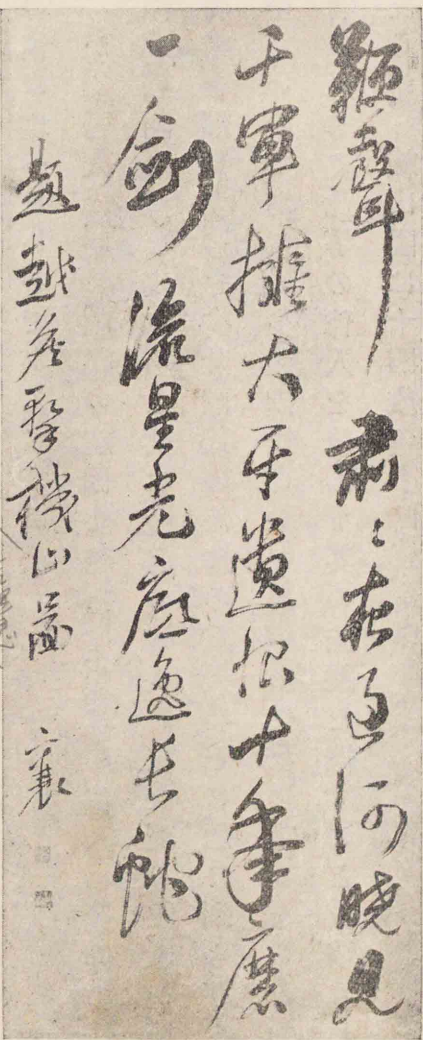
身を殺して
子曰、士仁人
無求、生以害
仁、有殺、身
以成仁(論語)

五人の大臣

- 伊藤博文
- 山縣有朋
- 山田顯義
- 品川綱次郎
- 野村靖

かく吾人は、明治昭代の起因を尋ねて、幾多の偉人に景仰の情を傾け、感謝の意を表すると共に、此等の偉人の後を受けて、我が國の將來を經營すべき少壯國民の任務の重大なるに想ひ到らざるを得ないのである。少壯國民にして、自家の任務の重大なるを知る者は、又よく此等の偉人を學んで、其の先蹤を繼ぐことを務めねばならぬ。頼山陽は十四歳の少時に、十有三春秋、逝者已如水、天地無始終、人生有生、死、安得類古人、千載照青史、と歌つた。古來の偉人が少年、青年の時よりして、漸く發達した逕

路を尋ねると、多くは前代の偉人を景仰して感憤興起したのに基づいて居るのである。偉人を景仰するのは青年自然の情であつて、この情の生ぜぬものは、其の志多くは低劣で、其の行亦多くは鄙



陋である。吾人は前偉人に活理想を求めて、こゝに志氣を振ふことが出来るのである。志氣が振つて、こゝに向上發展の途に就くのである。

固より、古來偉人の人格には、おのづからにして卓越したものである。偉人の事業には、時代の大勢が與つて、其の背後の力となつて居るものもある。それで偉人を學ぶものが、誰も皆偉人となり得るといふことは、難い。併し、偉人を學ぶことに依つて、天才ある



孟子像
聖人は百世の師なり
(孟子盡心下)

者は益、これを英偉に發揮することが出来る。凡庸なものは、其の人として最高度の發展を爲し得るのである。孟子は、聖人は百世の師なり。伯夷、柳下惠是なり。故に伯夷の風を聞く者は、頑夫も、廉に懦夫も、志を立つるあり。柳下惠の風を聞く者は、薄夫も、敦く、鄙夫も、寛なり。百世の上に奮ふ。百世の下、聞く者興起せざるなしと云つた。偉人を學ぶべき者は、ひとり偉人には限らない、懦夫も、鄙夫も、みな偉人に依つて鼓舞せられ、激勵せ

られ、感化せられ、指導せられ、以て向上の一路を辿るべきである。且古來凡庸を以て嘲られ、微賤を以て輕んぜられたものが、他日巍巍として衆目を驚かすやうな發展を爲し得た事が、少なからず史上に存するのを思ふと、今日不幸な境遇に生活し、凡庸愚劣と評せられて居るものも、決して失望自棄するを要しないのである。前に列擧した維新前後の六偉人のごときは、何れも皆微祿の士であつた。南洲特に海舟の如きは、眞に赤貧洗ふが如きものであつた。松陰・景岳の如きは、生來虛弱多病であつた。南洲のごときは、少年極めて魯鈍といはれたものである。松菊・甲東のごときも、少時は意氣が壯なのみで、特に英才の煥發した譯ではなかつた。若し彼等が精勵刻苦して勳功を建つるにおよばず、不幸夭折したならば、青年偉人として後世に傳へらるべきことは、何もなかつたであらう。これ等のことをおもふと、*「我も人なり、彼も人なり」といふ思想*

王侯將相
(史記、留侯世家)
舜何人ぞ
(孟子、滕文公上)

は、決して僭越狂妄として排斥すべきではない。「王侯將相寧ぞ種あらんや」といつたのも無理ではない。顏淵は、舜何人ぞ、予何人ぞと云つた。有爲の士の志を立つることは、常にかくのごときものである。

今や我が國は、世界の日本として大活動大發展を爲すべき時に臨んでゐる。公私各般の事業において英偉なる人物を要することは、甚だ急なのである。今日の多數青年の中、誰かよく前英に續ぎ來者に先だつて、大業をなすであらうか。偉人を師として奮起するは、終生の最大快事であつて、假令運命は、其の人をして偉人の名を成さしむるに至らしめずとも、我として最高の發展を爲し得たならば、人生の目的はこゝに達せられたと謂ふべきではあるまいか。(青年修養訓)

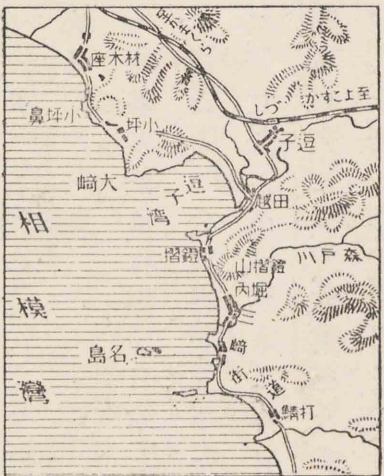
讀み

か

二六 逗子より

徳富 蘇峰

いつの間にやら秋風身に沁む頃と相成り候。憂なきこの心は物の悲しさを覺えず面白く嬉しく、楽しく暮し居り候。この八月二十六日は舊曆の七月既望にあたりたれば、晚餐の箸を投じ、大いなる麥藁帽を戴き、悠々然として逗子の濱邊を過ぎ、養神亭なる友人の寓を訪れ候。さて相携へて三崎街道に沿ひ鐘搦山にいたり候。この山は頼朝が三浦出遊の時、にて鐘を搦りし故にかく名



逗子附近の地圖

合戦の時
治承四年

雪舟
通稱小田等楊
名高い畫僧
雪舟墨畫



づけたりと口碑に存じ居候。三浦義盛、畠山重忠と合戦の時、に陣を取りしよし、源平盛衰記に見え候。文明の恩澤は、この山の絶壁を切り下げ、海に沿うて馬車をも馳せ得べき大道を開き候。位置は小高くして海上に斗出し、逗子灣を隔てて小坪岬と相對し、恰當の觀月臺に候。やがて月は鐘搦山の背より出でくれば、海上蒼茫として、たゞこゝかしこに月影の反射を見るのみ。當面の富嶽は雪舟の描ける淡墨畫の如く、恍惚としてまことに夢の如くに候。不思議な

るかな、かねて見おぼえもなき奇峯突兀として富嶽の周
圍に立ちならぶ。こは上州なる妙義山の飛びきたれる
にか、さても面白きことよと、とくと吟味致したれば、雲に
てありけるもをかしく候。

われら二人は興に乗じ聯歩快談はやくも天地深寂たる
森戸川の橋上にいたり候。月はまさに、われらの帽簷に
きしりのほり候。清光は隈なく、相模洋より伊豆の島々
を照らし候。海上に天あり、天上に海あり、月は海上にあ
るか、波は天上にあるか。月と共に涌きくる高潮は、寄せ
て捲きて、碎けて散りて、黄金の波となり、白金の浪となり、
真珠の濤となり、錦繡の瀾となり、天地の心をいひやぶる
雄大玄深なる音楽を奏し候。

東鑑

鎌倉幕府の記

録

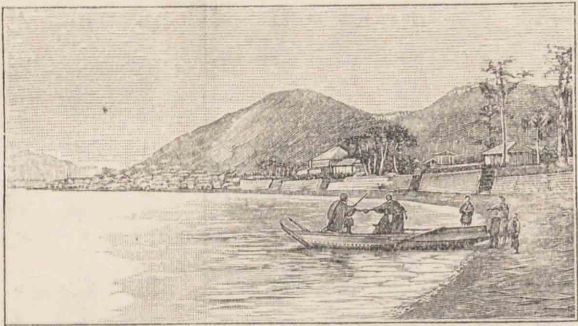
五十一卷

森戸海水浴場

武衛

源頼朝

今人云々
唐の李白の作



森戸川を渡りて右に折れ、亂松の間を蛇行すれば、やがて
森戸神社なり。松林帯のごとく海上につらなり、林盡き

て巖そびゆるところ祠堂あり。幾多
の巖巖を隔てて名島と相對し候。ま
づこのもよりの絶景の一にて候。東
鑑を按ずるに、元暦元年五月十九日、武
衛道遙海濱給。自由比浦御乗船、令著
杜戸岸給。御家人等面々、飭舟路各取
掉争前途、其儀殊有興也。於杜戸松樹
下有小笠懸、是士風也、と見え候。かれ
を想ひこれを憶うて、いと昔の人の

思ばれ申候。今人、不見古時月。今月曾經照古人。古人

井上梧陰
子爵
名は毅

の懐しきにつけても、また行末いかなる人をば照らすら
んなど思ひつゝ、歩行致す程に、いつしか突渡の崎にさし
かゝり候。これより井上梧陰先生の別墅もほど近し、つ
いでなれば門を敲くも一興ならんとて、捷路をとりて濱
邊に下りゆき候。
月は益、さえて潮は愈、たかく、ことにこの邊は奇礁、狂巖、亂
立したれば、濤聲、凄じきばかりに候。ふと見れば、かなた
の巖上に大いなる鷺の如きもの佇み居候。近づけば人
なり。更に近づけば、思ひきや梧陰先生ならんとは。
かくて先生に導かれて濱邊の裏門より入り、榻を庭除に
移し、婆娑たる松間の月影を眺めつゝ、江湖の漫談に打興
じ、覺えず時刻を移し候ふうち、生憎や怪雲、月を掠めきた

鬼
神
水
の

六代御前
平維盛の子

り候。いざさらばと辞して濱邊に出づれば、黒紗の如き
雲の絶間より月こそ現れて候へ。
三五の村舎、いまは死よりもしづかに眠り候。冷かなる
風はそよ／＼と、御最後川の汀に叢生したる蘆洲を吹渡
りて、髪ともなく額ともなく頬ともなく嘗め候。黯淡た
る雲に彩色せられたる月光は青白く、六代御前の森の上
にかゝり候。
御最後川の橋上より眺むれば、幽かなる火光一つ二つ、こ
れ漁燈か、これ鬼火か、存じ申さず候。
宿に歸りて戸を敲くをりしも、雨點兩三、はら／＼と帽簷
に落ち候。草々不宣。

室生犀屋
名は照道
現代の詩人

二七 光の泉

室生犀屋

泉中に目をさましそなたをりんと
月が私の泉のその真上を照らして
あふだけの光が注がれて
地は光に打たれて湿つて

今も静かに眠つてゐる自分の泉
私が穿つた西戸の青は
泉の底の上をわたり
月の中に身を宿すをりやうだ
川にまた何物かあり
見守りしてゐるわが微妙さがあふ

その美しき光の泉

あきなる光の泉
絶えず人の心に入込み
永く生ずるつらさを考へさせる

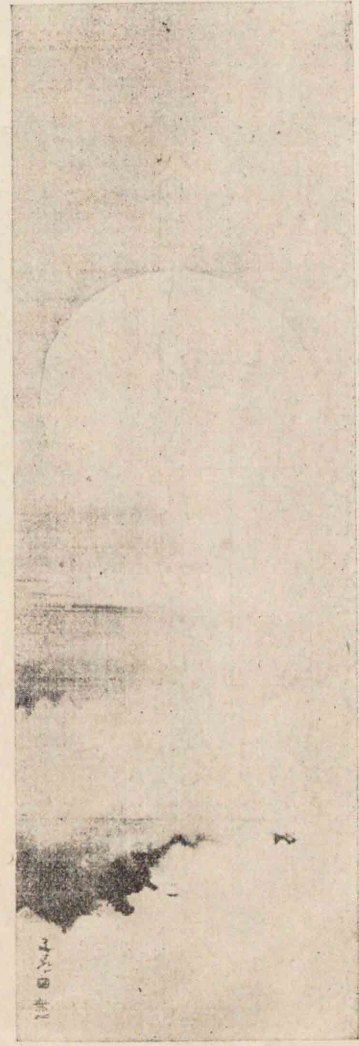
光の烈いさ新しさをあかさに
今宵も私は抱かれて
眠の中にあふれて
庭に湛えられた激しい水は
静かな庭を歩かせる
あふれてゐるわが微妙さがあふ
あふ明くは未来の心を

書取

二八 月雪花

芳賀 矢一

赫々たる活動の日の光、西に沈めば玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照らす。月の光は溫和で、日光の様に峻烈ではない。日は仰い



で見ること出来ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出づれば、群陰皆影を伏して、大小の有象無象悉く照破されるのであるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてし

月(谷文晁筆)

影... 陰... 光... 月... 影...

月見... 影... 光... 月... 影...

うちむかふ
荷田蒼生子の
歌

まふ。月の光は慰安の光である。慈愛の光である。炎熱を伴なはな
い清冷の光である。高潔無垢、崇美と稱ふべきやさしい光である。
休息安靜の夜には最もふさはしい。この光に對しては誰しも人
生の慰藉を感じず、詩的情緒が油然として涌く。晝の間は猛獸と
闘つて居る熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れ
うが、隈なく世界を照らす月光の、人の胸懷にしみ渡ることは、恰も
その影が、千草の露の玉ごとに宿るやうなものである。「うちむか
ふ月は一つのかげながら、うかぶはちゞの思なりけり」である。

東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光
にむかつて訴へられた。これを嗟歎し、これを吟咏した詩歌は、世
界各國の言語に充ち満ちて居る。天文學者は云ふ、月は地球の衛
星で、全く死んだ冷塊であると。この冷たい光は、古往今來どれ程

~~~~~

の暖かみを人間に與へたか、又與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。

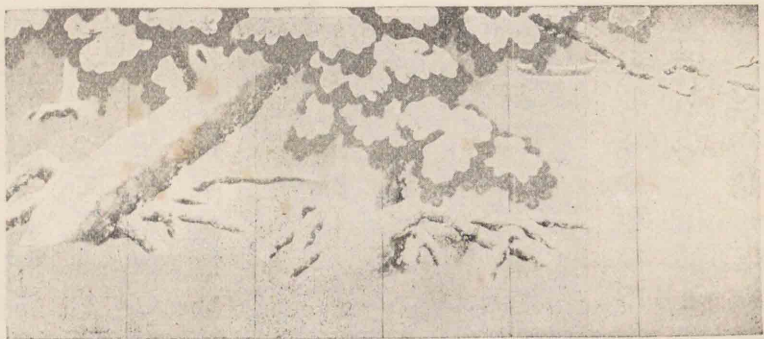
雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔な色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓茅屋も皆同じ色に埋められる。げにや、花ならば咲かぬ梢もまじらまし、なべて雪降るみ吉野の山といふやうに、眼に入るもの、悉くその下に包まれてしまふ。「月にみがけるあまのかぐやま」の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして別世界に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白の色に比べては、地上の花もひどくきたなく感ぜられるのである。霏々と散り紛々と飛んで、唯一條の川を残して、山といはず、野といはず、瞬く中に瓊玉を敷く莊嚴は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花、紅葉色々の

神 (七)

10/13/12 (E)

花ならば  
新續古今集、  
律師仙覺の歌、  
月にみがける  
雪ふれば嶺の  
まさかきうづ  
もれて月にみ  
がけあまの  
かぐやま(新  
古今集 藤原  
俊成)

雪  
(寺崎廣業筆)



眺は、素より美しいに相違ない。花の散つた後の新緑の色も、目の覺めるほど鮮かであるが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、對照の妙、變化の奇眞に造化の巧をつくしたもので、なからうか。一年中、蓮の花の開いて居る極樂淨土は、決して我等の世界ほど楽しいものではあるまい。

雪に埋もれた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまざま、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり咲きみだれるのは、人生とし

てはあまりに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、芳しい香さへもつて居る。我等の食用の爲に作つた菜や大根のやうな花でも、無限の詩趣を備へて居る。富豪の庭園に培ふ花に價の生じたのは無理は無いが、山の花野の花、何れも月や雪と同じ様に、一文錢を要せぬのである。人生に花がなかつたなら、いかばかり寂寞を感じずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を慎んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花を離れぬのである。月雪のながめはその高潔を



花 (池上秀故筆)

花をし見れば  
年ふれば齡は  
老いぬしかは  
あれど花をし  
見れば物思も  
なし(古今集  
藤原良房)

山櫻  
新古今集  
康資王の母の  
歌

冬ながら  
古今集  
清原深養父の  
歌

愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艶麗・華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ・花やか・花々しい、華美・華麗・華奢等の語は、みな花に基づいた語である。古今東西の詩歌は擧げるだけおろかである。余は唯、花をし見れば物思もなし」といふ古歌を以て、すべてを包括し得べしと信ずる。月雪花三つのながめは各、その特長があつて、いづれを前、いづれを後といふことは出来ぬ。

山櫻花の下風吹きにけり

木のもとごとの雪のむらぎえ

これは、花を雪に喩へたのである。

冬ながら空より花のちりくるは

雲のあなたは春にやあるらん

これは、雪を花に喩へたのである。

笠は重し  
諺 葛城の句

笠は重し、吳山の雪靴はかんばし、楚地の花。肩上の笠には無影かげの月を傾け、擔頭の柴には不香ふかきの花を手折る。

これは、雪を月と花とにたとへたのである。花を賞して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪をめでぬ人も無い。

思へば世界の一部には、全く花を知らない國もある。一年中氷雪に鎖されてゐるアイスランドでは、氷は即ち人の家である。この地方には、寸紅の目を楽しませるものも無い。又これに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇観は見たことがない。瓦斯電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜ふけを知らぬ繁華な倫敦の住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見ることが出来ない。我等日本人が、昔も今もこの三つの眺を擅とらにすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

世々を経て  
伊藤仁齋の歌

月雪花のながめは、古人の歴史が加はつて一層の感興が増す。

世々を経てながめし人の數にまた

われをもゆるせ秋の夜の月

月は、古來の歴史を照らす鏡である。

年々歳々花相似 歳々年々人不同

人生の感は花を見てますます、繁く雪を見ていよいよ、多くなる。

二千五百年來、月雪花三つの眺を有し得たる我等の祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に傳へ、如何に多くの追慕を我等に催さしめることであらう。(月雪花)

年々歳々  
唐の劉廷芝の  
詩句

中學新國文 卷七終

挿繪筆蹟 卷七

六頁 傳貫之筆蹟 づらゆき

おとはやまこたかくなきてほととぎすきみのわかれをしむへらなり  
ふちはらのうちかけかゝらものゝつかひに

七頁 紀友則筆蹟

立春日

みつのおもにあやふきみたる春風や  
いけのこほりをけさはとくらん

三三頁 墓石の銘

GOOD FRIEND FOR JESUS  
SAKE FORBEARE,  
TO DIGG HE DUST ENCLIO-  
ASED HEARE:  
BLESE BE Y MAN Y SPAR-  
ES HES STONES,  
AND CURST BE HE Y NO-  
VES MY BONES.

四八頁 馬琴の原稿

釋迦如來も亦是人、我心の本來他

を求めずして這身に在り。觀ずると  
きは世音通ず。機感圓通自在にして、  
響の物に應ずる如きを、名つけて觀  
世音といふ。心の常を如來とす。心  
常なく禪定なければ終に了悟の時を  
得難し。迦毘羅の名義は第一第二の  
編、第二の編中に見えたり。夫金石の  
堅固なるも、火をもてこれを攻れば  
折もしつべし、砕くも易かり。かゝ  
れば亦石拆に修行鍛煉の別義あり。  
又淨藏の淨藏たる、前にもいへること  
ながら、是心頭の如來にして迷悟  
の判る所なり。迷と悟と賢と不肖と  
は、人我五臟の淨かると淨からざる  
とにあらんのみ。迷ふものは迷を知  
らず、悟るものも悟を覺えず。迷悟  
兩ながら忘れて後にはじめて維摩の  
室に入るべし。

文政十三年庚寅春正月吉日新版

曲亭馬琴識

六一頁 和泉三郎燈籠の銘

奉<sub>レ</sub>寄進<sub>シ</sub>

文治三年七月十日 和泉三郎忠衡

六五頁 象潟(芭蕉翁繪詞傳挿繪)の圖の

右にある詞

蔭うつりて江にあり。西はむやむ  
やの關路をかきり、東は堤を築て秋  
田に通ふみち遙かに海北にかまへて  
浪うち入る所を汐こしといふ。江の  
縱横一里はかり面かけ松島にかよひ  
て異なり。松島は笑ふかことく象潟  
はうらむかことし。さひしさに悲し  
みをくはへて地勢魂をなやますに似  
たり。

象潟の雨や西施かねふのはな

七一頁 鬼貫筆蹟

初郭公 花はちれとしら雲の山ほと  
ときす 鬼貫

七二頁 支考筆蹟

はつゆきや竹に雀をかさるほと 支  
考

七三頁 乙由筆蹟

落書は鳥の跡や今朝の雪 乙由

七三頁 希因筆蹟

奉納 さみたれに猶籠はや連歌堂  
暮柳

別 蕉門十哲(渡邊華山筆)

右一 夜もすから秋風吹や浦の山  
會良

右二 としよれば聲もかるゝそきり  
智月

右三 我か事と輪のにけし根せりか  
な 丈雪

右四 文七に踏るな庭のかたつむり  
キ角(其角)

中上 應々といへとたゞくや雪の門  
去來

中下 梅の花あかいはあかい赤い花  
惟然

左一 蓮の花おもしろかるは慮外ら  
し 支考

左二 しら桃や雫もおとす水の色  
桃隣

左三 行としや親にしらかをかかくし  
けり 越人

あけそめしやみのにほひも色見えて  
ほのく明る窓のうめかえ

社頭雪

白雪のふるきにかへれ神垣も道ある  
御代は跡を尋ねて

別 刷 賀茂真淵の像

古事乃學能業乎波士弓能始米伊射  
奈比諸人乎教閑坐那留縣居能大人乃  
功者鷄鳴東乃國尔名迦迦勢留不盡乃  
高嶺乃天會管理高伎賀如玖彌高余仰  
藝恐美思奉牟  
古事乃學乃祖登萬代尔言繼行牟縣  
居能大人

宣 長

一〇三頁 澤庵筆蹟

清風明月

一一四頁 謡曲原本

七騎落

シテ立衆「身は捨小舟うらみても身  
は捨小舟うらみてもかひなきや憂世  
なるらん ッレ頼朝」これは兵衛の佐

歌平大平謹詠書

挿繪筆蹟 卷七

左四 鳥帽子着てしろきもの皆小田  
の雁 嵐雪

八二頁 菊川の宿

太平記に曰  
俊基朝臣再び關東へ下向有し時、  
宿の名をとひたまへは菊川と答ふ。

承久の軍に、光親卿院宣書給ひし罪  
に依て、關東へ召下され、此宿にて  
昔南陽縣菊水といふ四句を書たりし  
事を思出て、遠き昔の筆の跡、今は  
我身の上に成り、あはれやいとまさ  
りけん、一首の歌を宿の柱にそ書れ  
ける。

いにしへもかゝるためしを菊川の  
おなじ流れに身をや沈めん  
承久記には中御門前中納言宗行と  
あり、太平記に光親と有は誤てるも  
のか

風俗通云

南陽縣有甘谷 谷水甚美云、  
其山有大菊 水從山上流下得其  
滋液 谷中有三十餘家 不復穿

井添飲此水、上壽百二十三中百餘  
下七八十名之洞天

八五頁 本居宣長の筆蹟

しきしまのやまと心を人とは朝日  
にほふ山さくららはな

八六頁 眞淵筆蹟

橘のぬしの二郎のみとり子うまれて  
初て神詣させ給ふにのみ侍る

九一頁 本居宣長筆蹟

常世もの代にかをるへきたねなれば  
梅の宮の神を護らむ

年の始によめる

立かへりほのく明るひかりよりか  
すむもけさを初春の空

望霞思花

咲ぬらん花のたよりの春風もたえて  
つれなくかすく遠山

春曙

のとけさは同じ色音の花鳥もまつね  
やの戸を明ほのゝそら

晚梅

地「さて二番には新聞の次郎シテ」又  
三番には土屋の三郎 地四番は土佐  
房五番にはシテ「實平殿、六番には

一四六頁 木戸孝充筆蹟

恭賦「六字句」奉呈 松菊拜具  
踰得幾多險海、浴來無限思波、他年  
有他年在、此夕如「此夕」何

一四七頁 大久保利通筆蹟

今南方已定、兵甲已足、庶竭駑鈍  
攘除奸兇、興復漢室、還于舊都、  
此所以報先帝、而忠陛下之職分  
也。

一四九頁 藤田東湖筆蹟

誰道嚴冬取醉難、滿堂和氣不知  
誰、寒湖風吹雪晚來急、故把酒盃  
排戶看、雪中對酒、東湖居士彪

一五二頁 頼山陽筆蹟

鞭聲肅々夜過河、曉見千軍擁大  
牙、遺恨十年磨一劍、流星光底逸  
長蛇、題「越侯擊機山」圖、襄



昭和七年六月十三日  
 昭和七年八月十二日  
 昭和七年八月十五日  
 印刷發行

中學新國文  
 全十册

| 卷數        | 定價    |
|-----------|-------|
| 一・二・三・四・五 | 各六拾五錢 |
| 六・七・八・九・十 | 各五拾五錢 |

著作權所有



不許複製

編者

笹川種郎

發行者

東京市神田區仲猿樂町三十番地  
 株式會社 帝國書院  
 代表者 增田啓策

印刷者

東京市京橋區銀座西二丁目三番地  
 高橋郁

發行所

東京市神田區仲猿樂町三十番地  
 株式會社 帝國書院  
 振替口座東京六七〇一四番

關西販賣所

大阪市東區橫堀町四丁目三番地  
 三宅莊藏書店  
 振替口座大阪六九番

Vertical text on the left side of the right page, possibly a title or header.

Vertical text in the middle of the right page.

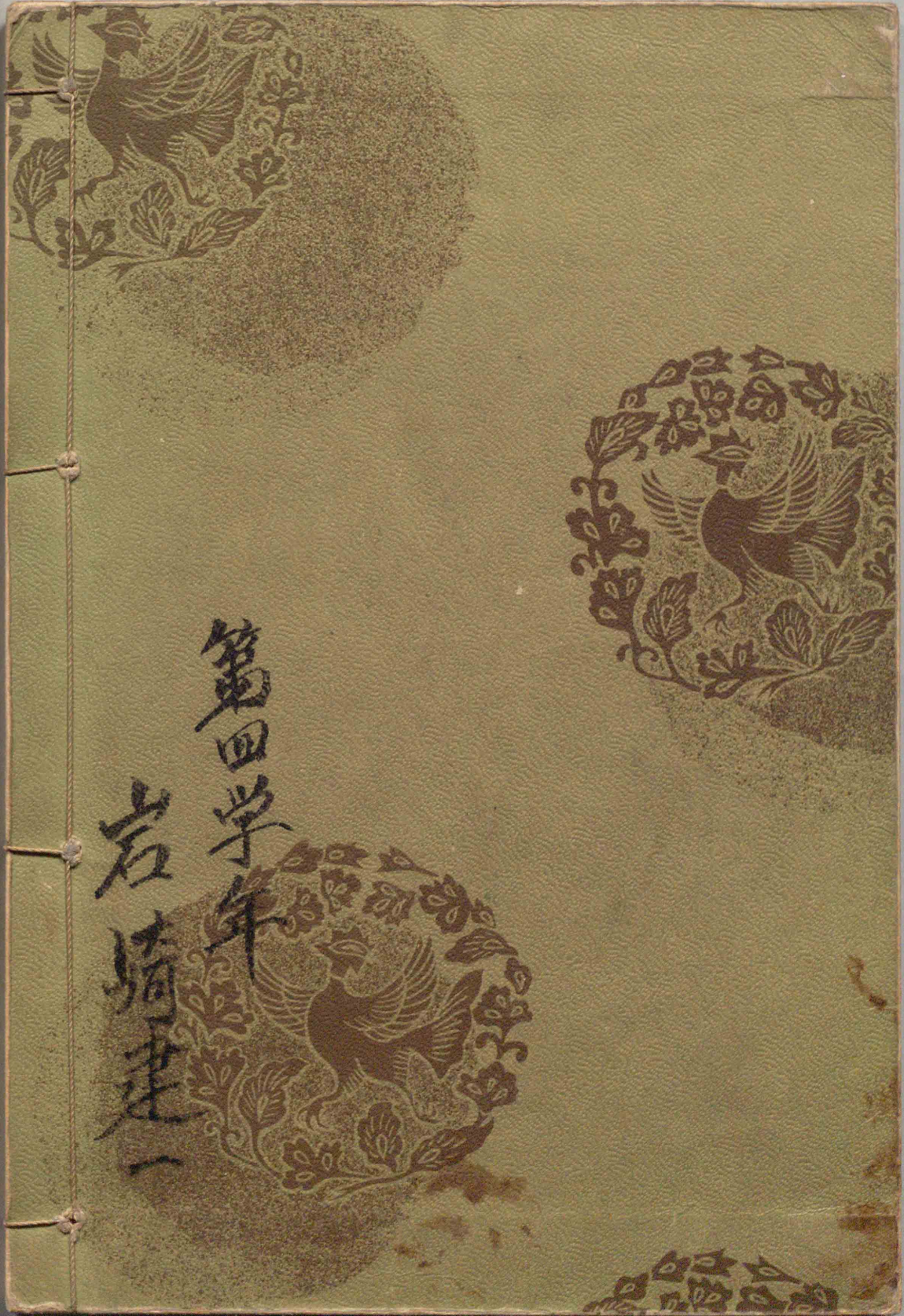
Vertical text at the bottom of the right page.

|                                 |
|---------------------------------|
| Table with 2 columns and 1 row. |
|---------------------------------|

Vertical text block in the middle of the right page.

Vertical text block in the middle of the right page.

Vertical text on the right side of the right page, possibly a signature or date.



第四学年  
岩崎建一